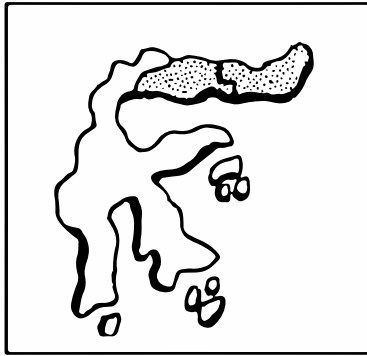




日本人会会報

北スラウェシ日本人会
NORTH SULAWESI JAPAN CLUB

Tarsius

タルシウス

第38号



マネンボネンボ海岸からドゥアスタラ山の眺め 撮影：長崎

令和2年3月発行

目 次

01. 宗教との関わり	今泉 宏	P. 02
02. インドネシアの健康保険 BPJS	中村 高太郎	P. 04
03. マグロ探しの旅	大貫 周明	P. 12
04. 書籍紹介-小坂清見著「わが青春のメナド」		P. 17
05. 編集後記		P. 48
06. 北スラウェシ日本人会会員名簿		P. 49

宗教との関わり

今泉 宏

北スラウェシ日本人会の皆さま、明けましておめでとうございます。新年を無事に迎えられたことを神様に感謝いたします。

罰当たりな行いを散々してきた私が今更神に感謝もないかと思いますが、昨年はいろいろあって宗教と真剣に向き合った年であったのでそのことについて少しお話ししたいと思います。

インドネシア人の妻と結婚してから今年で15年目になりますが数年前から急激に関係が悪化していて昨年の最悪の時期にはもう別居か離婚かというところまでいっていました。そんな時に私たちが信仰しているカトリック教会にCFM（カトリック・ファミリー・ミニストリー）という組織があり、CFMが開催しているキャンプ・プリア・スジャティ（真の男になるためのキャンプと言う意味）というセミナー合宿があると紹介され参加することにしました。このセミナーは主に夫婦間に問題を抱える人たちのためのセミナーです。

合宿はトモホンのカトリック教会関係の合宿施設にて2泊3日で行われました。現地に到着してからまずは5人プラスリーダー1人の6人ずつのグループに分けられ、何の説明もなくそのまま通常のミサが始まりました。ミサが終わるとプレゼンターが出てきて自分の以前の悪行とその後プリア・スジャティに参加してからどのように改心し今に至るのかということを聖書の言葉などを混じえて話します。話が終わると参加者たちは各グループに分かれ自分の抱える問題やプレゼンテーションに関する感想などをグループ内で共有します。最後に希望者数人が全員の前に出て自分の抱える問題を告白したりプレゼンテーションに対する感想を述べたりします。これで1つのセッションが終了です。セッションごとにテーマがあり途中でプレゼンターが交代したりして1日に3セッションほど同様なプロセスを繰り返します。その間に食事があったりミサがあったりして夜の8時ぐらいまでみっちり続きます。翌日も同様で、最終日は半日で終わります。時間的には長時間拘束されるので疲れますが何か考え方を強制されたり大声を出したりというような自分を追い込んで自己啓発するというようなセミナーではなく和気あいあいとしたゆるい雰囲気でのセミナーでした。部屋は3人1部屋で夜は別のグループの人たちも集まってワイワイと過ごすので同期の参加者たちとの絆ができます。

セミナーの内容自体はそれほど目新しいこともなかったのですが同様な問題を抱えている人たちのコミュニティでそれぞれの問題を告白しあいグループの仲間同士問題が解決するようにお祈りをしあうということをするのですが、これは思いの外効果がありもう少し頑張れるかもと元気づけられました。これが宗教なのかなと思った瞬間でもありました。

今までにも教会にはちょくちょく通っていたし教会関係の集まりにもよく顔を出していたのだけとただ妻に付き合っただけで自発的ではなかったからあまり得られるものはなかったし、こちらも求めるものはなかったもので形式的なものでしかありませんでした。今回のセミナーへの参加は自分の力ではどうにもできない問題を解決したいという大きな目的があったので自分自身積極的に関わることができたと思います。自発的集中的に関わったことでカトリックという宗教に対する理解度も大きく広がりました。

そしてセミナーが終了し妻と対面した時には妻の表情がすっかり明るくなっていたのです。多分自分がそれだけ「真の男」に近づけた(笑)ということなのかなと思いました。この数週間後にはキャンプ・プリア・スジャティの女性版キャンプ・ワニタ・ブルヒクマツ（賢い女性になるためのキャンプ）というセミナーがあり妻は自分も頑張ると張り切ってこのセミナーに参加し、これもまた帰ってきたらすっかり「賢い女性」になっていたのです。やはり何度かは問題が起きましたが2人ともなすべきことを頭にしっかりと植え付けられているので簡単にとはいえません。が何とか2人で乗り越えることができるようになっていたのです。

ただ時間が経つとまたいつの間にかもとの悪い状態に戻っていたなんてことがよく起こるのですが、このプログラムにはセミナー後のフォローアップもしっかり準備されていて聖書を読む会があったりグループの仲間と集まって現状を報告しあう会があったり個々が常に繋がりあってセミナーで学んだことを何度も思い出させるような仕組みになっています。そして次の期のセミナーが始まると卒業生はグループのリーダーになったりサポーターとして裏方を担当したりして同時に復習をすることにもなるのです。

因みにこのセミナーは宗教は関係なく誰でも参加することができます。

基本無宗教の日本人は私も含め宗教に対して無関心な人がほとんどですが、このインドネシアでは子供のころからそれぞれの宗教を学んで育つので、対話をする時に同じ宗教的価値観を持っていると話がスムーズにいくことがあります。夫婦や家族間の問題には特に効果があると今回の問題で強く感じました。

本年もどうぞよろしくお願い致します。皆様にとって良い年になりますように。

インドネシアの健康保険 BPJS

中村 高太郎

インドネシアには、日本の国民健康保険に位置づけされる健康保険として BPJS というものがあります。この保険の特徴は、1 人月 400 円～1500 円程度（従来は、この約半額であったが 2020 年 1 月より、2 倍になった※）で加入でき、医療費が全額保険適用という公共の医療保険です。
※追記：2020 年 3 月に最高裁で値上げ無効の決定が出て、今後、従来の料金に戻る見込み。

BPJS 保険は、クラス 1～3 までのクラスで保険料の差がありますが、これについては入院時の部屋のランクが違うのみという事です。つまりは、使用する薬や治療内容は、クラスが違って同じであるという事になっています。（あくまで建前上は・・・ですが）

インドネシアの病院は一般的に VVIP や VIP ルーム、クラス 1、クラス 2、クラス 3 の病室と、処置室や ICU などからなっています。処置室や ICU は患者の希望でそこに入れるわけではなく、病状や医療上必要と言う場合にそこで治療を受けることになるわけですが、BPJS ではクラス 1～3 が適用され、VVIP や VIP 室は、自費（BPJS の場合は差額）で入ることになります。

このクラスについては、加入時に指定します。一度指定したら設定時点から最低 1 年間は変更できません。（これは通常は一番安いクラス 3 に加入しておき、病気になったときだけクラス 1 に変更して、病気が治ったら、また直ぐにクラス 3 に戻すようなことを防ぐためだと思われます。）また（KK と呼ばれる家族証明書に記載の）家族単位でクラスを指定しますので、親はクラス 1 で子供はクラス 3 という事はできません。したがって大家族ではかなりの額になります。

またインドネシアでは、貧困層向け（約 8600 万人いると言われます）の補助があり無料医療制度がありますが、これは、BPJS クラス 3 に相当すると言われます。ただし、かかりつけ医は、政府が決めたプスケスマス（公共診療所）に固定されるなど、若干の制限はあるようです。

使いようによっては、インドネシアでは、非常に有用な保険ではあると言えますが、しかし、一方で使いづらいところ・思わぬ落とし穴もあり十分気を付けないと、こんなはずではなかったとか、大変なことになる可能性もあり必ずしも万能なものではありません。（特に一旦、弱者になったときに助け合いという保険本来の機能というものは薄いという個人的な感じがしました。あくまで個人的に感じたものです。）

注意点①

「病院受診にあたっては、救急受診を除き必ずホームドクター（掛かり付け医）もしくはプスキスマス（公共診療所）の紹介状が必要」となっています。

これは、BPJS で病院を外来受診する場合、紹介状が必要で紹介状がないと自費で受診するか、そうでない場合は、機械的に門前払いとなります。（民間の保険の場合は、提携病院へ直接受診したりすることもできるようですが、各保険会社の約款によります）

例外として、救急部門（UGD とか IGD とか書いてあるところ）に受診する場合に限っては、直接病院へ行くことができます。これは、40 度近い熱が出たとか、休日などホームドクターが休みという緊急の時にはなりますが BPJS の適用となります。（37.5 度で熱っぽいぐらいで救急に行くと風邪薬を渡されて、お帰りくださいとなるかもしれません。）

つまり、BPJS 加入者が「いきなり」病院に行く場合は、保険を使わず自費で行くか救命救急部門（IGD などと書かれている）所に行くしかありません。しかし、救急は生死にかかわる緊急の救命治療をする場ですから、「本来の疾病に対する治療」や「最近、なんだか調子が悪い・・・」といった慢性的な症状や治療・検査には当然向きません。

ホームドクターも、BPJS の監査や色々書類を書かないといけないとか、関係のある病院に送り込もうとしたり、病院からたいした事ないという診断で差し戻されたりするのを嫌うなどで、なかなか的確な紹介状を書かないこともあるかもしれません。日本も多少そういう医者同士の忖度のようなものがあるかもしれませんが、こちらは日本以上にあるかも、という意味で。

その結果、病気が悪化して救急に駆け込むといったパターンも潜在的にあるかと思います。

（インドネシアの医師は、一人で 4 病院まで掛け持ちすることができるそうです。）

注意点②

注意点①に関連して、BPJS の保険適用は、インドネシア国内のみ。またインドネシア国内でも、どこの個人クリニックや病院でもよいという訳ではなく、プスキスマス（公共診療所）および「BPJS 提携の個人クリニック」、「BPJS 提携の病院」（注意点①の適用には、救急もしくは紹介状による受診が必要）の受診のみ適用されます。また、通常、初めに受診するプスキスマスまたは個人クリニック（ホームドクター）については、BPJS 加入時に指定する必要があります。この指定は設定した時点から最低 3 か月間に変更できません。

日本の国民健康保険は、事後請求となりますが海外で受けた医療についても 3 割負担が適用されます。一方で、BPJS は、海外での適用は一切ありません。インドネシア国外での医療に関しては、民間の海外でも適用される保険（海外旅行保険など）を検討する、或いは、日本に帰ったときのみ住民票を入れて健康保険に加入の方がよいでしょう。

注意点③

注意点①や②は誰でも分かることだと思いますが、注意点③は、特に見落としがちですし、私も、「えっそうなの?!」という感じだったので、特に詳しく取り上げてみようと思います。

「BPJS 保険は、犯罪を原因とした負傷などの治療・医療サービスには適用されない」

つまり路上で見ず知らずの「通り魔からいきなり刺された」という状況でも、BPJS の保険適用になりません。そうすると、病院に担ぎ込まれても、病院側が、治療費を踏み倒されることを懸念し、デポジットやら見せ金を要求され、治療開始が遅れる可能性も十分にあると思います。

家族等が付き添いまたは連絡できれば、まだよいですが、一人で犯罪被害に遭遇した場合で、通りがかりの見ず知らずの親切な人によって病院に運ばれ、意識もなく、身分証を入れた財布やバックも見当たらないとか・・・の場合最悪ですね。病院まで運んでくれた親切な方が、支払いまで担保してくれるのも難しいでしょう。

(こういう見方をすれば、この BPJS 保険や制度は、善良な人に対して、『犯罪被害者に下手に係ることで負担を要求されないか』などの心配を誘発し、通常なら親切心から手を差し出す者も見えて見ぬ振りをする・躊躇してしまう考えを植え付ける倫理・道徳的な危険すらあるという、最低なものであるという見方もできます。あくまで極論ですが・・・)

また、犯罪には、テロ被害なども含まれています。テロではない場合で、デモや暴動で巻き添えを受けた(飛んできた石が当たったなど)場合は、どうなるか分かりませんが、病院側も BPJS 側から犯罪性を指摘され、保険が下りない可能性を危惧してデポジット等を要求してくることは想像できます。

つまり、緊急的な避難や救護が必要な弱者に対し、かなり問題のある保険であるとも言えます。

なおこれは、次の法律で規定されています。

Peraturan Presiden Nomor 82 Tahun 2018

⇒大統領令 2018 年第 82 号

Tentang Jaminan Kesehatan

⇒健康保険について

Pasal 52

⇒第 52 条

(1) Pelayanan kesehatan yang tidak dijamin meliputi:

⇒(1)保険サービスの適用外

< a ~ p まで省略 >

r. pelayanan kesehatan akibat tindak pidana penganiayaan, kekerasan seksual, korban terorisme, dan tindak pidana perdagangan orang sesuai dengan ketentuan peraturan perundangundangan;

⇒ r. 法令の規定によるところの
傷害、性的暴力、テロの犠牲および
人身売買の犯罪に対しての
保健サービス

rだけを抜粋しましたが、その他の項目も重要です。BPJS に加入している方や関心がある方は、是非、目を通しておいってください。例えば自然災害なども適用対象外、自傷（自殺未遂なども）も当然適用対象外です。それだけでなく、危険な趣味だとか自分で自分の健康を害する行為も含まれていることが分かります。（インドネシアの法律は、時にどのようにも解釈ができる緩い・曖昧な部分もあり、今後、BPJS 側が支出を抑える為、病院や医者が BPJS を安易に適用するとペナルティを厳しくするなど、極端に言えば、喫煙者が肺がんになった場合、自らの意思で喫煙して故意に健康を損なう行為をしたと保険適用を認めないなどの解釈もできるかもしれません。）

さて、保険を使わない（自費診療の）場合、日本よりも絶対的な治療費が安い（両国での全額自己負担の場合で比較）とは言え、刺されて手術ともなれば傷の程度にもよりますし、病院によって異なりますが、事前に5～10万円前後のデポジットを要求され、最終的な治療費としても、10万円～数十万円程度の治療費用になってしまうでしょう。さらに、インドネシアの場合は、付き添い看護が一般的のようですので付添人の経費（交通費・食費・その他）も馬鹿になりません。

このようなことから、一旦、被害者になってしまうと、被害者の家族は親戚中を駆け回り（最低でもデポジット分位の）お金を無心してかき集めねばなりません。まさに泣きつ面に蜂です。

さらなる問題として、おそらく加害者としてのインドネシア人の多くは責任能力（損害賠償や治療費の支払いを行う能力）が期待できません。短絡的な犯罪者の多くは、貯金や資産がない事も多々ありますから、開き直りです。したがって犯人が警察に捕まったとしても、加害者本人やその家族から治療費の相殺として相当分のお金を出してくれば、被害者側からも情状酌量など刑期の短縮を要望するなど提案することで和解や示談に持ち込むとかも、難しいと考えられます。

民間の保険の場合も、保険会社によって保険適用の要件が、多少異なることが予想されますが、どうしてもきに保険が利く・利かないは、確認しておくことが、重要だと思います。

上記の「犯罪での BPJS 保険は適用外となる」は、2018 年の法律で制定されました。2019 年の法律では保険料が2倍になる事も制定されています。そこまでしないと適正運用ができないのも、問題で当初の見積もりが甘かったのか、分かりませんが、このまま、民間の保険と差がなくなってくるとか民間の保険のほうがコストパフォーマンス的に優れているとなると、民間保険への乗り換えも発生するでしょう。また BPJS 内でも（各クラスの差が、入院時の部屋が、8人部屋か4人部屋か2人部屋かで違うだけであれば）クラス1⇒クラス2やクラス3に変更なども多数あることが予想されます。そうなった場合、サービスの質と運用は、維持できるのだろうか？

結果的に前述の締め付け強化や適用の可否の厳格な審査につながり、本来重要な治療と言う部分がおろそかになるのではないかと、という心配もあります。

そして、前述したように、一応、クラスの違いは病室の差という事ですが、BPJS クラス 3 のものと無償医療制度のものが運ばれてきて、病床が 1 つしか空いていないという場合は、どうなるのだろう、そういった疑問がわいてきます。また、私は BPJS クラス 1 に入っていますが、いままです 2 度入院したことがあります、2 度ともクラス 1 は満室という事で、クラス 3 の部屋でした。2 日目ぐらいに部屋が空いたので移動しますか？となります。

「安かろうがまあまあ」(～2017 年) だったものが「安かろう悪かろう」(←今ココ) となり今後「高かろう悪かろう」(2020 年～?) となっていけば、当然、加入者は流出することが容易に想像できます。これらの問題が改善することを願ってやまないところです。

この BPJS は、昨年まではインドネシアにしては、当初まあ悪くないのでは、でしたが、現状では、微妙な所です。需要としては、インドネシア国内での職場や会社等で民間の保険に加入していない方やそもそも会社等に所属していない方(個人)が、掛け捨て程度に考えて加入するとよいのではないかと思います。なお、加入するには 6 か月以上インドネシアに住む予定で、かつ、KITAS もしくは KITAP を所有している必要があります。

なによりも、やはりケガや病気にならない事が大切ですね。病院のベッドで、BPJS 保険を使って元がとれたぜ!! となっても、全然うれしくなく、悲しい限りです。

さらに犯罪となると、BPJS 保険もおりません。インドネシア人は、せっかちで切れやすいところがあります。酒と口論から始まり、簡単に切ったり刺したりに発展という事もあるようです。BPJS ではなく、民間の保険が適用できた場合は、不幸中の幸いですが、それでも、痛い思いをして病院のベッドで過ごさなければならぬのは、大変な苦痛です。まして BPJS の場合は、保険が適用されないとすれば、加害者側に責任能力という事になりますが、ここでは、それが期待できない可能性が高く(どうぞ刑務所にでもぶち込んでくれと開き直る)、そうすると最悪です。

従いまして、加入している保険の適用有無に関係なく、くれぐれも、そういった事件に巻き込まれないよう注意しましょう。

さて、今回の BPJS では、犯罪関係で負傷するなどして病院へ行った場合は、BPJS は適用されないという発見? は、実は妻の親類が年末 12/31 に喧嘩で刺された事がきっかけになりました。この刺されたという、原因も些細な事のように。12/31 に刺され、ビトゥンの病院で手に負えず、マラヤンの病院に搬送されたようです。

その親類はというと 1/1 にマラヤンの病院に、お見舞いに行ったところ、痛々しくベッドに横たわっていました。彼の保険も最高のクラス 1 ですが、使えない（BPJS が適用されない）という事で、自費で一番安いクラス 3 に相当する 8 人部屋にせざるを得なかったそうです。

そしてお見舞いでは、驚愕の事実を目の当たりにします。まず何か所か刺されたそうで、腸も体外に飛び出していたそうですので、手術が行われ、体からは沢山のチューブが出ています。ここまででは、おそらく日本でも同じような状態になるでしょう。しかし日本と違うのは・・・

動けませんので、おしっこはチューブを通して袋にたまるようになっています。あんなところにチューブを差し込まれるのは、とても痛そうですが、何と「おしっこが溜まる袋がベッドの上に無造作に放置」されていた！！のでした。これでは、尿が溜まってくると袋と膀胱の間を往来して一向に袋に入らないでしょう。膀胱炎になるかも・・・寝返りは打てないと思いますが、誰かベッドの上に腰かけて、たまたま下に袋があったら・・・考えただけでも恐ろしいですね。

妻を通して、看護師に指摘したところ、何食わぬ顔で「プラスチックの袋に入れてベッドの脇に縛っておきなさい」・・・と、「エッ?! ハッ?! ...それはオマエの仕事ではないか?」と日本語で言いました・・・、親類の家族は、従順にせさせと言われたようにやっていましたが、チューブはねじれたまま、さらにプラスチックの袋に入れたものの、尿のたまる袋に接続されているチューブが下方向を向いている・・・確かに看護師の言った通り、プラスチックの袋に入れてベッド脇に縛ってはいるが、私も見るに堪えなく「こうしないと袋の中に流れないですよ」と、（これだから看護師がやるべきだよ! と、ココの国は何かが違うと心の中で呟きながら）チューブのねじれを戻しつつ、チューブが袋の上に来るように正しく、向きを整えました・・・

そして、さらに驚愕だったのが、染み出した体液や膿を排出するために腹腔に挿入されたドレーンに至っては、チューブ先端の袋が足のふくらはぎの下に無造作に置かれ、ふくらはぎで押し潰されていました。実際に、ふくらはぎの体動で排泄が行ったり戻ったりです。親類の家族は、手術から戻ってきて看護師らがベッドに置いたときから、このままだと言います。

年末年始だったので、本当にこの病院にマトモな看護師がいるのかわかりませんが、しかし、これでは、排泄が適切に排出できないばかりか、足を動かせば排泄が体内に逆流する可能性すらあります。（実際にチューブの中を少し行ったり来たりでしたから・・・）もし大きく逆流して細菌が増殖した排泄が体内に押し戻されれば、敗血症で死につながる危険も大いにあります。これについては、看護師がなにも指示もしませんでした。どう考えてもおかしいので、同じようにベッドに脇に下げるようにしました。

ここまで来ますと、呆れる限りです。そしてマラヤンの病院は、マナド、北スラウェシ州で一番大きな公立病院のはずです。サムラトランギ大学の医学部もここで研究と研修しているわけですから、日本でいう都道府県での基幹病院や大学病院のような先進性も必要でしょう。

しかし、この現状を見る限りでは、これでは日本の中でも、ずさんな管理で院内感染を出すような五流のいい加減な病院にカテゴライズされているようなもので、残念ですし、ここまで来ますと、もはや医療技術の問題ではないことが分かります。単に人間の問題です。医師や看護師の質と言いますか、国民的なもの、文化・モラルなどが影響しているのかもしれない。せめて日本の三流病院ぐらいになってほしいところです。

もう少し責任感とかモラルがあれば、今まで当たり前のように死んでいた多くの命が救われ、救われなかったとしてもすこしは快適に過ごせたのではないかなと思うほどです。もちろん最終的には、全ての人は、いずれ死を迎えるわけですが、そこに至る過程と言うのは大切だと思います。

多くの人は、先進諸外国をうらやむ一方で、大半は、実際に声を上げ立ち上がることもなく、一人一人が自分自身の責任感やモラルには向き合わない。もちろんこの責任感やモラルが必要なのは医師や看護師だけではなく、インドネシアの全国民、つまり、医療機関を利用する立場の者も、自覚し実践しなければ、全体的な意味がありません。

また、国や医療機関は、医者や看護師のモラル教育というよりも、どちらかと言うと最新・最先端の技術や高度医療機器の導入を重視する傾向にあります。これは、手っ取り早く簡単に表向き宣伝効果や評価がしやすいからだろうと思われます。

そして、お金のある人は、そそくさとシンガポールなどの医療機関に駆け込むわけです。

こうなると結局はインドネシアのすべての人々は、現状に満足していないと言いつつも、満足している（受け入れている）という事なのでしょう。設備技術的には日本より20年程度遅れをとっている感がありますが、モラル的なものを考慮すると、もう比較になりません。

2020年は皆様にとってよいお年になりますように。

また、くれぐれも健康にご留意ください。そして犯罪には巻き込まれないよう注意しましょう。

最近是中国の新型ウィルスも猛威を振るっているようですし、マナドも、中国各地から多数の観光客が訪れています。過剰に心配する必要はないと思いますが、手洗いやうがいの徹底など基本的なことは押さえておくべきでしょう。

以上

・・・と1月の下旬に締めくくったつもりでしたが、1月末から持病？の頭痛発作がおきて、2月1日夜に病院に担ぎ込まれて入院となりました。入院は、子供の時（幼稚園～小学生の頃で35年以上前が最後）は、それぞれ別の病気で何回（3回？）か、日本の病院に入院したことがあったものの、幸いその後は大人になっても縁がなかったのですが、ついに2009年1月にインドネシアで入院したのを皮切りに、今回で4回目の入院（全部インドネシアだけ）となりました。

今回は、5日間入院してしまいましたが、退院後も、しばらく頭痛に悩まされ療養、それで1月下旬に長崎編集長から預かった会報の最終編集も、長らく手元で止まってしまった状態でした。会員の皆様には、遅れてしまったことをお詫び申し上げます。

さて、遅れている間に、中国からのウィルスも2月からは日本も他人事ではなくなり、インドネシアでも3月に入っては、日本人がインドネシアに持ち込んだと報道があり、中旬には感染者と死者が一気に増えて（ようやく検査をしだした証？）戦々恐々としてきたイメージがあります。

実際、3月の初めまでインドネシアでは感染者が0人でしたが、単に検査をやっていなかったというだけだったのでしょうか。日本でも、医療機関がパンクしないように（or オリンピックとかを意識して）検査の実施を管理していたのではないかという話もありますが、インドネシアも「彼らにとって何か」大切なイベント等を意識し検査を積極的にしなかったのかもしれないね。

先文章では、BPJS を酷評してしまいましたが、さっそく2月の入院で利用させていただきました。（しかし今回は部屋がクラス3しか空きがなく、退院予定の前日の夜に空きが出来たというお知らせがあり、何をいまさら、ということで、全日クラス3でした。）

BPJS の制度も、なんと、**2018 年の法律で、予定通り 2020 年 1 月から保険料が2倍になってしまったのが、3月9日には最高裁判所（Mahkamah Agung）が無効という決定を出した**のです。今後は、従来の保険料に戻る見込みですが、1月と2月分は払い戻しになる？（月々の徴収から相殺することになるらしい）のかよくわかりませんが、加入者にとってはうれしいニュースですね。・・・しかし、そもそも、今の保険料ではやっていけない・サービスを維持できないという必要不可欠な理由で2倍に値上げしたわけですから、今後の BPJS 運営と存続そのものは、本当に大丈夫なの？というところです。（システム屋から見れば、改修費なども、どれだけ・・・）<そのようなことで、先文章の訂正になります>

「安かろうがまあまあ」（～2017 年）だったものが「安かろう悪かろう」となり今後「高かろう悪かろう」（2020 年～？）となって、今「安かろう悪かろう&存続大丈夫か？」（←今ココ）

1月末から3月下旬までに、世界的にも私的にも色々な事がありました、何もかも、すべてが行き当たりばったり感ですが、まあ何とかなる（それでやっていくしかない）のでしょう。

すべては、今後に期待しましょう。

以上

マグロ探しの旅

大貫 周明

皆さんこんにちは。

最近はずっかりインドネシアのマグロも高価になってしまい、商売激減です。

そこで、新しい供給基地を探しに、今年は色々なところへ行ってきましたので、今回はその時のことを書きたいと思います。

① セーシェル共和国

セーシェルって、どこよ？南米？というのが一般的な反応だと思います。

セーシェルはインド洋に浮かぶ小国です。一般的にはリゾート地で知られています。中国人のツテを使い、今、まさにマグロの加工場を建設中という方に会ってきました。中国政府はセーシェル島の開発に熱心で、建築、電気、水道などインフラ整備は中国の企業が中心に行っています。大型の工事現場などでは中国人労働者でいっぱいでした。実はセーシェルはマグロ業界ではモーシャスと並んで冷凍のマグロやカツオが大量に水揚げされる場所として知られております。漁獲している船は、ほとんどがフランスやスペインの大型巻網船。

巻網船が獲ったものは缶詰の原料用にタイなどへ出荷されております。その数量、年間 24 万トン以上。私が訪問した時も多くの巻網船が水揚げしておりました。私の目的は巻網船ではなく、地元の小型魚船が近海で漁獲する生鮮マグロです。そこで、まずは近海船が集まる漁港に行ってみました。おー、綺麗に整備されている港じゃん。と思ったら、日本の JICA による開発港でした。市場も製氷場も立派（あまり使用されていない）。早速マグロ漁船を見つけ聞き込み調査です。セーシェル人船員は 2 人だけ（規則で最低 2 人本国人がのる）で、他の船員はスリランカ人とインドネシア人でした。マグロ漁船あるあるですが、インドネシア船員、どの国の船にもいる説の通りです。ここで水揚げされる生鮮マグロは良品は全てスリランカへ空輸されておりました。おそらく、スリランカ産として欧州や日本などへ再出荷されているのでしょう。

セーシェルに 1 週間滞在して感じた印象は

- ・観光地なので物価が高い
- ・経済は華僑が牛耳っている
- ・治安は良い
- ・金持ち多い
- ・すごい豪雨がある
- ・カジノは勝てないので近づくな



フランスの大型巻網船



近海のマグロ延縄船



JICA の援助で整備された港



ちょっとやらしい双子ヤシの実

② マダガスカル共和国

マダガスカルと聞いて、何をイメージしますか？バオバブの木？あと、変なサル。変わった動物がいる。それくらいです。僕もよく知りませんでした。

マダガスカルは世界で4番目に大きい“島”だそうです。島と大陸の違い、わかりますか？ググってみると意外な答えが！グリーンランドよりも小さい陸地は“島”になるそうです。それだけ？なんじゃそりゃです。

ある会社の調査依頼で南西部にあるトゥリアラ地区に10日間ほど滞在してきました。最貧国と聞いてはありましたが、ここまでとは。ビトンが大都市に感じます。物価も安っす！道端の屋台で犬肉の串焼きが1本3円位。しかもうまい。でも滞在中はずっとお腹の調子が悪かったです。（ネシアでは大丈夫なのに）

トゥリアラから北に20キロ程行ったところに、マグロ村という場所があるそうなので、早速行ってみました。マグロは獲ってるけど、なんせ船が小さいので、あえて小さいマグロしか

獲っていないらしい。ダメだこりゃ。10年後に期待。

街を歩いていると常に物売りが話しかけてくる。軍隊の建物の前を通っただけで銃を向けられる。物乞いの子供に小銭を恵んでやると大変なことに。僕にも僕にもと来るわ来るわ。毎朝、滞在先のホテル前には子供ストーカーがいっぱい。

空港では、出入国カード詐欺、ポーター詐欺など当たり前。なお、首都のアンタナリボ にも行きましたが、どの空港にもX線の検査機械がない。どうやって荷物を調べるかというと、カバンから全部出す（やっぱりそうか）。アンド全身くまなく身体検査。怪しいものはとりあえず没収。こんなところ、もうコリゴリ。

マダガスカルの印象は

- ・ 貧乏だが食べ物豊富（でも必ずお腹壊す）・怖い人や悪い人が多い
- ・ 何かで一発逆転できそうな感じ ・ 何にもないところ ・ 子供には気をつけろ



電気もガスもない漁村の家



こんな船でマグロを。。

③ レユニオン島（フランス海外県）

ビトンの長崎さんが昔レユニオンを基地にマグロ漁業していたと言っていたので、一度行ってみたいと思っていた島です。それ以前には聞いたこともない地名でした。とりあえず、空港に到着し、車を借りて漁港っぽいところへ行ったらローカルのマグロ漁船が停泊していました。港のゲートに関係者を装い無断で突破し、車を船に横付け。カタコトのフランス語で、日本から来た、マグロ買いたい。などと必死で伝えと、何とかかなり、輸出担当の部長のところへ連れて行ってもらえました。えっ、お前わざわざ日本から来たの？ しかもノーブラン（笑）

どうやら、こんな僻地まで海外のバイヤーは来ないようです。ノーアポだったのに親切に水揚げや加工場を見せてもらい、品質の目合わせも完了。この部長はレユニオン島のマグロ漁業

の歴史について教えてくださいました。マグロ漁業やっているのはうち 1 社だけ 15 隻の延縄漁船を運営しているフランスの漁業会社さ。俺たちフランス船が来る前は日本の漁師が船を持ってきたマグロを獲っていた。2 隻くらいだったか。その後にうちのフランス船が入ったんだよ。という事で、長崎さんの偉業はちゃんと語り継がれておりました。

レユニオン島の印象

- ・意外にも寿司屋が沢山あった。さすがフランス ・住んでいる日本人も結構いる
- ・物価は高い ・インフラは完璧に整っている ・でもホームレスもいる



オートメーション化の進んだ少人数で運営できる超衛生的な加工場を見学

④ 番外編 ビアック島（インドネシア）

1 万 1 千人の戦没者が出た、あのパプア州のビアック島です。

ビアック島に立派な水産加工場が 1 つだけあるとの事で見てきました。港の横に日本の ODA で建てられた超綺麗な水産加工場がありましたが、残念ながら稼働したことはまだ 1 度もないそうです。機材や設備は新品の手つかずのまま。現在はこの建物は地元のクリスチャン集会場としてしか利用されていないとのこと。

その理由は。。。水が出ないので。。。停電も多いし使えない。うーん残念。

結局、ビアック島慰霊ツアーに変更となりました。



すごいキレイな加工場が使えない。。。作る前に考えようね。

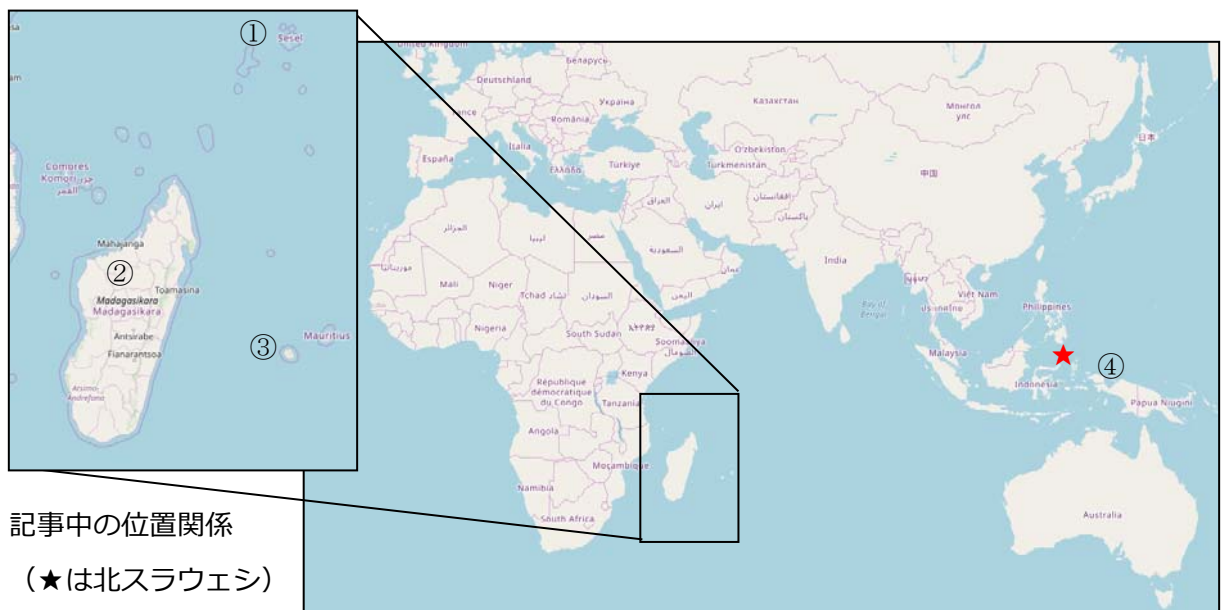


当時の武器や戦没者の遺骨はまだまだ島に残っている。檳榔が名物のようでどこでも売ってた。

で、結局どうなったかというと、2019年の年末～2020年の年始もビトンにありました。

例年通りビトンから日本へマグロの出荷です。ビトンに代わるマグロの供給基地はまだまだ見つかりそうにありません。

以上



記事中の位置関係
(★は北スラウェシ)

小坂清見著「わが青春のメナド」紹介

(編集部 長崎 節夫)

前号に続いて「わが青春のメナド」の紹介です。前号に掲載した第3部まで、北セレベス地方は戦争中とは思えないくらいのおんびりした空気を吸っているようでしたが、第4部からいよいよ緊迫したきな臭い匂いに包まれます。そして8月15日の敗戦、収容所生活、内地への引揚げ。著者小坂氏の北セレベス滞在は、ほとんど日米開戦から敗戦までの期間と重なります。

第1部	開戦	(昭和16年12月より17年3月まで)
第2部	メナド	(昭和17年4月より同年12月まで)
第3部	漂流	(昭和18年1月より19年5月まで)
第4部	爆撃	(昭和19年6月より20年7月まで)
第5部	敗戦	(昭和20年8月より21年4月まで)
第6部	帰郷	(昭和21年5月)

あとがき

.....

第4部 爆撃 昭和19年6月より20年7月まで

非常呼集

昭和19年の春ごろまでミナハサ地方は平和そのものであった。食料は十分にあり、それこそ花が咲き鳥が唄う、戦時下としては他所には申し訳ないくらいのんびりした日々が続いた。

しかし戦局が進むにつれ、凄惨な戦いを強いられた陸軍兵が、ハルマヘラやニューギニアから撤退してきて、この海軍占領地域に入ってきた。

また、この北セレベスそのものも三方を敵に囲まれた格好になったので、海軍も「メナド警備隊」の上部機関としてトンダノに司令部を置いてアンボン島から浜中司令官(海軍少将)、高崎副長(海軍大佐)、北川少佐などが移ってきた。

6月5日、夜中の3時に非常呼集が各戸に伝達された。女子、子供を除いた全邦人が警備隊前庭に集められ、湯村警備隊指揮官より「戦局は非常事態となった。今日、今から諸君の命は俺が預かる。各自それぞれ配置につくように・・・」との命令がくだされた。

全邦人が各小隊に編成され、小銃をわたされて各トーチカに配備され、「敵が攻めてきたらこの穴から撃つのだ」と兵隊さんに説明されたが、ばかばかしくて銃を放り出したくなった。

話によると、アメリカの艦隊がメナド沖に近づき、いつ上陸作戦をとるかわからない状況とのこと。しかし、いきなり上陸してくることはないだろう。敵が上陸する際は、空襲と艦砲射撃でさんざん叩いたうえで上陸することは必定で、その場合トーチカなどはいっぺんに吹き飛んでしまう。聞くところによると、わが軍は敵上陸に備えて海岸に石油を流し、火をつけて上陸を阻止する作戦とのことであったが、これも全くバカバカしい。こんな楠正成時代の戦術が今頃通用するものと本当に思っているのか？

しかし、軍でもそんなことは充分わかっているはずだ。ただ何もしないでむざむざ敵を上陸させるわけにはいかないの、一般邦人を犠牲にして一応こんな手段を考えたのだと思う。現に、正規の部隊は山手のほうまで後退させているではないか。

ちょうどそこに私が雇っているジョンゴス(下男)が心配してやってきたので、すぐ自転車をもらってこさせた。誰がこんなところで犬死にするものか。いざというときは自転車で司令部のあるトンダノまで行き、兵隊さんといっしょに戦い、せめて敵に手りゅう弾のひとつでも投げて死にたい、と真剣に思ったからだ。

そこに、主計部の江尻中尉が通りかかった。「小坂さん、そこで何をしているのですか？」と聞くので、「指揮官に命をあずけられて、このトーチカに配備されているのです」と、多少皮肉をこ

めて言った。すると、「冗談じゃない。君がいないと物資がどこの倉庫に分散されているのかわからないではないか。すぐ来てくれ」と言う。そういえば、非常事態にそなえて最近物資を各地に分散・格納したばかりであった。

「しめしめ」とばかり小銃はその場に置き、私は中尉についていった。そして海軍の幹部と相談し、役人や民間人のなかから緊急軍政に必要な人材を、私と同じようにトーチカから引き抜いた。当時はすでに配給業務以外の民政や民間経済活動はできなくなっていた。

日本人の女子が炊き出して握り飯をつくり、各トーチカに配った。急なことでおかずはないので、握り飯に生味噌をつけたが、これが大好評であった。実は以前に海軍から「近く飛行機百機がランゴアン飛行場に飛来する。その日に備えて味噌は配給停止し、貯めておくように」との通達を受けた。私は喜んで、わが社の工場に出荷停止を命じていたのである。（しかし、結局一機も来なかった）。そんなわけで、数カ月ぶりの味噌に皆は大喜びした次第である。

この一般邦人のトーチカ配備は、三か月後のメナド大空襲の日までつづいた。そのころのこと、私が漂流したときに立ち寄ったウナウナ島に怪しげな老女が出現し、「この戦争は日本とドイツが敗れる。鏡の中にヒットラーと天皇陛下が殺されるのが映っている」と語ったので人心が動揺しているとの情報が流れた。軍としては放って置けないので掃討作戦を実施した。私は一緒に食事したあのラジャのことが心配になった。

「7月7日にサイパン玉砕」のニュースが流れた。わが南洋興発は同島に甘藷栽培の要員として数千人の労務者（主として沖縄出身の人）をかかえているので無念至極、稲垣支店長が支店内に仏壇（のようなもの）を用意したので、皆、心から哀悼の意をささげ、冥福を祈った。

そのころ、民生部はメナド市民に「隣組」を組織させた。よその国に来てまで日本人にやったと同じ事を押し付けようとする。何という独りよがりだ。

「火の玉」が廊下を走ったことがある。

撃墜した敵機から押収した機銃を、性能検査の目的でA中尉が試射した。ところが発射の瞬間、手元で爆発し中尉は大けがとなった。直ちに病院に担ぎ込んだが重体である。ある夜、A中尉の様態が急変したので、当直の衛生兵が病院長を呼びにいったが、いつまで待っても戻ってこない。他の当番兵が探しにいくと、当の衛生兵は病院長室への長い廊下でひっくり返り気絶していた。

それこそ「しっかりせよと抱き起こし」気合を入れた。正気に戻った彼に「どうしたのか？」と聞くと、「病院長を起こしに廊下を急いでいたとき、青白い火の玉がA中尉の部屋の方角からまっすぐ走ってきて自分の股の間を通り抜けた。その瞬間、びっくりしてひっくり返り、あとのことはわからなくなった」と言う。衛生兵を励まし病院長室に入ると、病院長は眠ったまま苦しそうに悶えていた。無理におこして一緒にA中尉の病室に急いだがすでに遅く、A中尉はこと切れていた。

火の玉が廊下を走る、とは俄かに信じがたいことであるがこの話は事実、衛生兵が気絶したのも病院長が悶えていたのも事実であり、生死のはざまをさまよう戦地であればこそ、こんなことも起こるのだろう。それにしても、あのA中尉はどんなにか病院長に来てもらいたかったのか、その思いが火の玉となって病院長室へ走ったのだろう。

私は旧南洋貿易時代の支店長宅に一人で移り住んだ。小林悪代官が女を囲った家である。大きな家で、銀製のスプーン、フォーク、ナイフをはじめ各種の皿、コップなどの食卓用具はそれぞれ50セット分揃っていた。そこで私は使用人を10人くらい使っていたが、贅沢していたわけではなく、当地でのトアンプサル（大旦那）の生活の体面上、これくらいは必要であった。食事も、特に夕食のおかずは十皿くらい並んだ。

私の家の裏の丘に、いつの間にか陸軍がキャンプを張った。真偽はさだかでないが乾燥野菜を食べていると聞いたので、ときどき新鮮な野菜を届けさせた。

兵隊さんに食べてもらおうと思ってある日、善哉をバケツに二杯と、手回しのアイスクリーム製造機でバナナ入りアイスクリームをつくった。それを取りに来た中年の兵隊さんはアイスクリームを見てびっくりした顔をして、つぎにポロリと涙をこぼした。聞くと、故郷を離れ北支、中支を戦い抜き、ニューギニアからメナドに渡ってきた。アイスクリームを見るのは7年ぶりです、という話であった。

その陸軍のキャンプから准尉さんが訪ねてきた。その准尉さんは京城（ソウル）の本町警察署の近くで時計屋を営んでいたとのこと、京城で育った私は懐かしく、話がはずんだ。

その人の用件は、できれば将校以上の人たちをこの宿舎に泊めてもらえないかとのことで、家は充分広いので喜んで承諾した。この日から男澤という中尉さんを長として五人の将校さんが私の家に寝泊まりすることになった。しかも男澤中尉は私の本籍地の仙台出身とのこと、全く奇遇というほかはない。

将校さんの食事を提供したが、その豪華な食卓を見て男澤中尉は「小坂さんは毎日のように盆と正月をやっているね」と言う。陸軍の兵隊さんたちの生活を思うと私は恥ずかしくなった。

その頃になると毎晩のように敵の偵察機がメナド沖を飛んで行った。わが方の高射砲はただ沈黙している。あまり毎日敵機がわがもの顔で来るので腹が立って、私はある日男澤中尉に「たまには一発ぶっぱなしたらどう？」とハッパをかけたら、「ようし」と言って中尉は隊に戻り、「撃て！」と号令をかけた声が聞こえた。とたんに、ドカンと大音響がした。

すぐに海軍兵がとんできて「この辺で大きな音がしなかったか？」と調べ大騒ぎになったが、胸がスカッとした。

敵の偵察機は航空写真を撮りに来ていたようで、あとで聞いたところでは、その写真は真に精密に写されていたとのこと、例えば密林の中にわが軍のキャンプを設営しても、軍靴のあとやタバ

コの空き箱まで写っていて、ここにキャンプがあるとすぐ判明するそう。頭かくして尻かくさず、とはこのことか。

また、何らかの事故でこの偵察機 1 機がメナド沖の海面に墜落したことがある。直ちに敵機が助けに来て、搭乗者を救い上げていった。私たちから見える範囲の出来事であり、この間（もちろん作戦の都合上であろうが）わが方から一発の銃弾も発射せず悔しかった。

聞くとところによると、敵機には墜落に備えて救命ゴムボート（ポケットにオール付き）が搭載され、その中には携帯無線機、信号用の旗や花火、携帯燃料、救急医療品、ピストル、食料品（チョコレート、ドロップス、チューインガム、ミルク、コーヒー、レモン水）や、おどろいたことに釣り道具や小説本まで備えられているという。そして遭難者がたとえ一人でも徹底的に搜索し、どんな危険を冒してでも救助しようとする。米国人には人命を第一とする考え方が基本にあると思える。これは人命を一銭五厘（当時の召集令状のハガキ代）と称し、また「人より馬の方が大切だ」（人は代わりがあるが馬はいない）という当時の日本人の思考とは全く異質のものである。

爆撃

敵軍は今春以降、ビアク島やモロタイ島を占領した。それ以来敵機はしばしばそれらの航空基地からメナド方面に飛来するようになった。

8 月末日、メナド市から東方に 30 キロ離れたビトンに敵の 6 機編隊が来襲し、陸軍の貨物集積所（ニューギニア・ハルマヘラ方面からの引き揚げ品）を狙って大損害を与えた。メナドに住む我々はまだ他人事のようにしか聞かなかったが、実はこれがメナド大空襲の前兆であったのである。

用事があり、空襲後のビトンに行った。途中でたまたま憲兵の詰め所に寄ったとき、インドネシアの男を縛ってあったので訊くと、スパイ容疑で取り調べ中とのこと。ビトンからの帰途、気にかかるので詰め所に戻ったところ、その男の姿が見えない。訊くと「便所に行きたいというので紐をほどいて行かせたところ、便所の中で首をくくって死んでいた」との話であった。どんな取り調べを受けたのだろうか。言葉がよく通じないための行き違いはなかっただろうか？ 何れにせよこんな悲劇が起きるのも戦争がなせるわざである。

9 月 10 日朝、ゴーゴー、ゴーゴーと大音響がする。見上げると東の空いっぱい飛行機で埋まっていた。空気を震わせながらまっすぐこちらに向かってくる。あとから聞くと、これは「空の要塞」と言われた B 24 重爆撃機であった。9 機編隊で 9 グループくらい、それに戦闘機らしいものが数機つきそって、数えてみると約 100 機くらいが頭の上に飛んできた。あとで思うと変な話だが、そのとき私は全然逃げることは考えなかった。あつけにとられて立ったままゴーゴーと大編隊が頭上を飛び去るのを見ていた。

西の空に見えなくなったようなので「ボルネオへ爆撃に行くのかな」とのんびり思った途端、再びゴーゴーと大音響が聞こえてきた。戻ってきたのだ。今度は私も逃げようとしたがすでに辺

りは爆弾の雨で、仕方なく地面にころがった。ひょいと見ると手の届くところに黒い爆弾の小破片がある。初めて見るので記念に拾おうと思ひ、手を伸ばして触れると「アチチチ」とやけどをするほど熱い。当たり前だ。（この日から爆弾の破片などは山ほど浴びることになる）

私はかねてこのような事態に備えて事務所の近くに横穴式壕をつくらせておいた。全長約 100 メートルちかく。私の働く配給組合事務所から 100 メートルくらい東側にあった。

私がその横穴に飛び込んだとき、近くの人たちがすでに数百人避難していた。また、あとからあとから飛び込んでくる。轟音をたてながら敵機の爆撃は執拗につづく。原住民の女は泣き叫び、男はお祈りをしている。爆弾が横穴の近くに落ちるたびにブアーっという凄く強い風だ。入口に障壁の土盛りをしているにもかかわらず、真黒な砂煙が壕内に流れ込んでくる。

私の横にうずくまっていた三菱商事支店長がタバコに火をつけようとした。落ち着いたところを見せようと虚勢を張ったに違いないが、この黒煙のなか、とんでもないので私は押しとどめた。

頭上の高射砲陣地で時々発砲する音が聞こえたが、相当の高度を飛んでいる「空の要塞」に果たして弾は届いているのか？ いきなり「やられたー」と叫んで兵隊さんが壕に転がり込んできた。

爆撃の経験は初めてだが、人が作った道具で人が殺傷されるということはなんともやり切れない、惨たらしいことかと今更ながら悲しかった。いわんや、よその国同士の争いでこんなひどい目に遭わなければならないインドネシアの人達はどう考えているのだろう。

執拗な爆撃は 30 分くらい続いたであろうか（本当はもっと短かったかもしれないが、それくらい長く感じた）。爆音がしなくなったので私は壕から飛び出した。外には人っ子ひとりいない。あたりの建物はメチャメチャ二破壊されている。組合事務所に行って仲間の名を呼んだが返事がない。広場にまわって自分の会社の事務所に行って呼んでも何の返答もない。「おかしいなあ、横穴に避難した人以外はみな逃げたのかなあ」と思った。

それから二、三分くらい経ったとき、いきなり一人が飛び出してきた。引き続き大勢の人が飛び出してきた、あっという間に郊外の方へ走り去って行く。こんなにたくさんの人が防空壕などに隠れていたのかとあきれた。会社の女子事務員の一人が私の目の前を走った。「トルース、トルース」と、この娘の名前を呼んでも聞こえないのか、気狂いじみた空ろな目をして逃げ去った。

そのうちに配給組合の倉庫の屋根から火の手があがった。この倉庫には北セレベス用の配給物資がぎっしり詰まっており、特に貴重な織物類がたくさん入っていた。「何としても消し止めなければ」と思ったが、仲間の組合役員や使用人は皆にげってしまったのか一人もいない。やむを得ないので私一人で梯子を掛けようとしたとき、マンドルブサール（監督頭）のヌシが部下 10 人ばかりを引き連れて現れた。彼らは逃げずに職場にとどまっていたのである。

さっそく倉庫の屋根に梯子をかけ、私が先頭にヌシ以下が続いて屋根にあがった。水をかけ、棒で叩き、早めであったので何とか火を消し止めることができた。あとから調べてみたら、私の背中にやけどの跡があった。

この日の爆撃で在留邦人最初の犠牲者がでた。この人はせっかく防空壕に入っていたのに、あまりにも近くに爆弾が落ちてきたので怖さに耐えきれず他の壕に逃げ、そこで直撃に遭ったという。

情けないことに、配給組合の役員同僚たちは、その日から一週間も事務所に顔を出さなかった。中国系の使用人に至っては一カ月も来なかった。その間、私と行動を共にしたのは監督頭のヌシと彼の部下のインドネシア人だけであった。一か月後、彼らを代表してヌシを皆の前で表彰し、日本刀を授与した。本物の日本刀なので彼の感激はひとしおであった。

この日から敵機の空襲は毎日続き、二機、三機とリレー式に夜となく昼となく襲ってくるようになった。市内の民家はことごとく破壊され、民生部による「隣組」などいっぺんに吹きとんだ。だいたい、現地住民は一人も市内に住んでいない。

10月18日の朝、私は友人と二人で山の方へ自動車を走らせた。椰子酒集荷のためである。「今日はきっと大空襲があるよ」と私が言った。「なぜ?」「俺の誕生日だから」と冗談で言った。ところがそれが冗談ではなくなった。私たちが山の上に着いたころ、来るわ、来るわ、9月10日の大空襲に次ぐ大編隊がメナド上空を襲った。申し訳ないが自分たちは山の上から、それこそ高見の見物だ。

メチャメチャにやられた市内に大急ぎで戻った。組合の建物がいちばん徹底的にやられていて、高さ2メートルくらいの鉄製の大金庫が反対側の壁まで吹っ飛ばされていた。その日山に行かずに事務所に残っていたらどうなっただろう、とゾーッとした。私の誕生日というので誰かが届けてくれた花とケーキが無残に飛び散っていた。どこで敵の手に渡ったのか、「三菱」と刻印された不発弾がゴロリと転がっていたのが悲しい。

空襲直後のこと、道路の向こうから裸の人が歩いてくる。ほとんど素っ裸で大手をふって歩いてくるので当然男だと思ったが、近づいてみるとそれは何と女であった。空襲で気がふれたらしい。

このミナハサ地方の住民は9割以上がクリスチャンである。家という家はすべて破壊され、また市中に住むことは危険なので、彼らはカソリック、プロテスタントのそれぞれに分かれて山際に集団生活を始めていた。慰問を兼ねて私はある日、カトリック村の近くの林間で炊き出しをしたことがある。たくさんの人が集まって食事を楽しんでくれたが、なお、出てこない人たちもいるようだ。ニッパ椰子の葉でできた仮小屋を訪ねてみると、暗いところで病人が寝ている。マラリアだ。不衛生な生活が続いているので多くの人がマラリアに罹っていた。

マラリアの特効薬「キニーネ」はその頃品不足で貴重品であったが、私は海軍少佐の病院長と麻雀をして勝って、あまり良いことではないがキニーネの大瓶をくすねてしまっていた。そのキニーネを少しずつ病人の皆に配ることができた。麻雀も思いがけない功德を施したものである。

旧南洋貿易メナド支店に戦前、二人の中野君がいた。一人は背が低く、もう一人は高い。それで、

土地の人は低いほうを「中野ペンデ（低い）」、高い方を「中野パンジャン（のっぼ）」と呼んでいた。

中野ペンデは私と同年齢。インドネシア語ができるので海軍特別警察隊（陸軍でいえば憲兵隊）の通訳の軍属であった。通訳であったため、彼はのちに戦犯・銃殺と、悲惨な途をたどることになる。

「中野パンジャン」のほうは軍属としてパプアニューギニア方面で陸軍と行動を共にした。当時、日本軍は南パプアのポートモレスビー攻略を目指し、オーエンスタンレー山脈越えを試みた。通訳の同僚は5人。

一度は山頂まで到達したが、敵の空襲・逆襲に遭い、中途から撤退せざるを得なくなった。食料は尽き、トカゲ、草の根を食べながら密林の中をさまよった。同僚5人とも極度の飢餓に苦しみ、一步一步両腕で這いずり回り、ついには動けなくなったという。その中で「中野パンジャン」一人だけ幸運にも仲間の兵隊さんの担架に乗せられ、戦線を離脱することができた。これは後日彼が私どもの支店を訪れ話してくれた内容である。それにしても何と無茶な作戦を立てたものか。軍はポートモレスビーを占領し、そこを基地としてオーストラリア攻略を企画していたという。

わが社の社員同僚はなまじ現地の言葉がわかり土地の事情にも通じているので、このように多くの犠牲者を出さざるをえなかったのである。

12月8日、大詔奉戴日。

兵隊さんたちが用事があって来ても、配給組合には休憩所もない。そこで私は事務室の隣に喫茶室を設け、この日を記念してオープンすることにした。

早朝、メナド警備隊司令官の湯村大尉が組合に来られ、このオープンに感謝し日頃の活動に対する激励の挨拶があった。

この日のため、味噌工場に「善哉」と「羊羹」作りを依頼しておいた。また、山の方から土地の可愛い子ちゃん4人を連れてきて給仕としてサービスさせることにし、これで事務所に来る人が少しでも喜んでくれれば、と願った。

ところが湯村指揮官が帰られた直後、またも大空襲がはじまった。爆弾と機銃掃射の中、山から連れてきた女の子たちは慣れないのでマゴマゴするばかり。誘導してやっと逃がすと、今度はこちらが逃げられなくなった。仕方がないので米袋の山を障壁として身を隠した。やがて機銃の音が少し静かになったので立ち上がると、向こうの米袋の影から兵隊さんが一人首を出し、こちらを向いて「お前も逃げおくれたか」とばかりニヤリと笑った。

私は米袋から飛び出し、例の横穴壕へ走ったが、途中でとても進めなくなった。前方に機銃の土煙が立ち込めている。とっさに壊れたトラックの陰に伏せた。10メートルばかり離れたところに立っている木の葉っぱがピーっと真横に散っているのが見える。目の前にも機銃掃射の土煙があがる。

身動きもできず「小坂清見、ついにここで命を落とすのか」と覚悟を決めた。こういう場合、よく「親兄弟や妻子のことを思う」と聞いていたが、妻子がいない気安さからか私はそんなことは考えなかった。ただ、「自分は今日まで力いっぱい、自分に忠実に生きてきたか」と反省した。私は精一杯誠実に生きてきたつもりだし、このメナドに来てからも一日もやすまず頑張った。だから別に死にたいわけではないが、万一のことがあっても、「することはした」とう満足感で充実していると思った。

するとこのとき、左手の民家の壊れた壁の穴からニャオーと真黒な猫がでてきて、何事もないかのような大きなあくびをした。また、下の地面を見ると小さな、それこそ1センチにもたりない草が真っ赤な小さな花を咲かせていた。

猫でさえ欠伸し、小さな花でも咲くのに、万物の霊長たる人間の私がこんなところで死んでたまるものか、と思って顔を上げると、例の横穴壕の死角になった入口で友人がこちらを向いてニヤニヤ笑っている。きっと「小坂のやつ、あんなところでぼやぼやしていやがる」と思って笑っているに違いない。悔しいので意を決して「エーイヤっちまえ！」と、機銃掃射の土煙が立つ中を50メートル突っ走り、なんとか無事に横穴に飛びこんだ。

爆撃や機銃の音がやんで静けさが戻ってきたとき「味噌工場がやられているぞ、全滅だ」と叫ぶ声がした。味噌工場はメナド橋の際に位置するためか、これまでもよく狙われて、弾丸の破片が味噌に飛びこんだりしていた。私は「爆弾味噌」とふざけて命名していたが、工場の施設そのものがやられたことはなかった。私は兵隊さんの運転する自動車に飛び乗り、強引に工場に走らせた。

工場はメチャクチャに破壊されており、藤沢君の寝室は跡形もなくなっていた。私は「しまった」と思った。彼は寝坊助でいつもは朝10時ごろまで寝ている。朝の空襲であったので無事では済むまいと思った。それでも「フジサワ、フジサワ」と大声で呼んでみたが何の返答もない。遂に彼もやられたか、と思ったとき「オーツ」と声がして目の前の土の中から彼が顔を出したのには驚いた。「何だ、生きていたのか」というと「何だとはなんだ」と苦笑した。続いて堀尾さんもいつもの温顔で出てきた。

話を聞くと、私が喫茶店開店のため「善哉」と「羊羹」を作るよう頼んでいたのもので、堀尾さんは朝早くから小豆を煮るなど準備をしていた。藤沢君も付き合いでめずらしく早起きし、飛行機がやってきたので防空壕の入り口でコーヒーを飲んでいて、そのとき工場に爆弾が命中し、その爆風で壕の中に吹き飛ばされた。「善哉」が彼の命を救ったのだ。人の運命とはわからないもので、この日私も藤沢君も悪運強く？生き延びたのである。

市内はすでに壊滅的打撃を被った。配給組合を市中に残しても意味がなくなったので、事務所を郊外に移し、私自身も支店長社宅から郊外に移り住むことにした。その頃になると爆弾にも機銃掃射にも慣れてきて、大抵なことでは驚かなくなった。「危ない！」と思うギリギリまで普通に

仕事をつづけた。

鎌田という海軍少尉がいた。私が避難しないので「早く壕に入れ。こんな人がいるから皆が迷惑する」と言う。仕方がないのでその時は壕に入ったが、あごひげぼうぼうとした、いかにも強そうな少尉の顔を覗き込んで「ちょっと臆病すぎるのではないか」とからかった。ところがその鎌田少尉が言うには「自分は機関将校であり、いつも船の底にいる。そこにエンジンという頼るものがあり任務がある限り、たとえどんな空襲を受けても怖くない」と。現にこの少尉さんはボカ沈を喰って海を長いこと泳いだ勇猛の士である。「ところが陸に上がると頼るものがなく、つかみどころが無いので、何とも不安で仕方がない」と言う。そんなものか、と思った。

ところが、その反対の例もある。陸軍の飛行将校がしばらくわが家に泊まっていたことがあった。彼が乗った飛行機が故障で、近くの自動車修理工場で修理中であった。この将校は、ニューギニアからたった一機で逃れてきた人で、途中で敵の編隊に遭遇した。せっぱつまって彼は左右の翼をヒラヒラ上下させると、敵機は味方と勘違いしたのか、同じように翼をヒラヒラ上下させて飛び過ぎたという愉快的経験の持ち主である。彼に言わせると、陸地があるかぎり足があるかぎり自分は心配しない。どこへでも行ってみせると威張っていた。人はそれぞれである。

空襲がある場合、私は怖いというか一番いやだと思うのは便所か浴室にいるときだ。一度、私が素っ裸になっていたとき、いきなり家の前のヤシ林すれすれの低空で敵機が飛来したことがある。あわてて服を着て浴室を飛び出したが、ヤシの葉が大きく揺れていた。こんな場合が怖い。何としても裸のみっともない姿で死ぬのはいやだ。

監督頭のヌシと山の端を歩いたことがある。白い絹のような大きな布地が横たわっている。布地はたいへん貴重品なので、シメタと私が引っ張ろうとすると、ヌシがあわてて制止した。「トアン、これは落下傘爆弾の布地ですよ」。仕方なく私はやめたが、いかにも惜しかった。

ある日、そのヌシがやって来て「組合の馬が弾にあたって今にも死にそうだ。皆で食べてかわまないか」と。「死ぬのなら仕方がないだろう」と許し、その馬を見に行った。荷車に乗せられ、その馬は連れ去られるところであった。私が行くと首を持ち上げ、ヒョイと私の方を悲しげな眼で見た。これも戦争の犠牲者である。

ポイガル農園の佐伯さんはどうしているか？ と訪ねて行ったことがある。アメリカの農業大学卒業である佐伯さんは、現地住民の指導を兼ねて大量の野菜をつくっていた。大根、胡瓜、茄子、葱、何でも大変立派に育っていて、毎日のように陸海軍の兵隊さんがもらいに来ていた。野菜作りのコツは肥料のやり方と、何よりも内地から新しい種子を取り寄せていることだ、と言っていた。

かれは京都の出身で、同志社に在学していたことがある。日本からの便りで、同志社出身の学徒兵が敵機に体当たりして撃墜した、と聞いて我がことのように飛び上がって喜んでいた。

佐伯さんはこの土地の人たちから「生き神様」扱いにされていた。お父さんが医者であったせ

いか、彼も多少、医学の知識があったのであろう。現地住民の病気を診てやり、けがを治療してあげた。薬品の在庫はほとんどないので、クレオソート、メンソレータム、ヨーチン、薬草、仕方がないときは薬の代わりに歯磨粉まで使った由。もちろんすべて無料奉仕で親切に診てやったので彼は神様。信ずればこそ治ったのだろう。

メナド警備隊指揮官の湯村大尉が時々私の事務所に遊びに来るようになった。彼はメナドでは最高位の指揮官なので息抜きのために適当な場所が欲しかったのだろう。藤沢君が「ダイス」の道具一式をもっていたので、三人でよくダイスをして遊んだ。

あるとき、湯村大尉が真面目な顔になって「おたくの稲垣支店長さんを前に殴ったことがある。若気の至りでまことに申し訳なかった」と、私に謝った。そんな話は支店長から何も聞いていなかったのが驚いた。しかし、軍隊の悪いところはすぐ殴ることであり、将校はあまりしなかったが下士官あたりがいちばん威張って、一般邦人を殴った。しかも、よく現地住民のいる前で殴ったりした。当初のころからメナドに住んでいて一度も殴られたことがない邦人はおそらく私一人くらいではなかっただろうか。また、現地住民は特に顔や頭を殴られるのを嫌うが、日本人は平気でよくそこを殴る。ちなみに、自慢にもならないが、私は使用人をはじめ誰にも一度も手を上げたことはなかった。

トンダノにて

やがて、軍政、民政、経済の各機関は（メナド警備隊を除き）すべて司令部のあるトンダノに集結した。各会社による実業団も結成され、配給組合の各社の役員もすべてトンダノに移った。

私は一人だけメナドで頑張っていたが、主計部の江尻さんから「早くトンダノに来てくれ」と呼ばれたので、とうとうメナドを別れることにした。トンダノはメナドから南へ 30 キロほどはなれた山地にある。

昭和 20 年 4 月、私はトンダノに事務所を開設し、住宅も移した。実業団の役員にもなり、塚本実業団長（メナド造船社長。退役海軍少将）の秘書というか副官的な仕事も担当した。

自動車で団長のお供をして司令部へいく。退役したといっても少将様だ。歩哨の前を通過するときラッパが鳴る。やはり気持ちのよいものだ。司令部には浜中司令、高崎副長（参謀長）がいて、退避用の洞窟もできていた。

メナド警備隊の湯村指揮官は常にメナドにいるが、連絡のため司令部に行くときはトンダノの私の家で顔を洗ったり休んだりするようになった。

下男たちはメナドから連れてきたが、女中は連れてこられなかったので、トンダノで新たにマリーという娘さんに手伝ってもらうことにした。

今まで私は自宅には現地住民を同居させないことにしていたが、このトンダノでは自由に開放した。戦況がひっ迫し、住居や食料に困る人が出始めたからである。あるとき、自宅の裏方に回っ

てみた。居るわ、居るわ、勤め人らしい者や労務者風の者など、多くのインドネシア人が居候を決め込んでいた。マリーは居候を含めた十数人の小坂一家の賄のため食料集めに苦労していたようだ。

このトンダノにももちろん敵機が来た。メナドに比べて人家が少ないせいか、爆撃機より戦闘機の来襲が多かった。戦闘機なら爆撃機より気が楽だ、と思ったら大間違い、本当は戦闘機のほうがうるさい。

「向かうところ敵なし」であった我がゼロ戦に対抗してアメリカが昭和 18 年に開発したグラマン戦闘機は、前後に 13 ミリ機銃を装置しており、通り過ぎた、と安心したら後部からも撃ってくる。油断も隙もない。また、新鋭の P 3 8 双胴機はクルクルクルクル自由に旋回し、どこまでも追いかけてくる。ときには畠道の一人を狙って、顔が見えるような低空を白いスカーフをなびかせた搭乗員がどこまでも撃ってくる。ゲームを楽しんでいるとしか思えない。

ある日、監督頭のヌシに運転させ、トラックの荷台に苦力数十人をたたせて仕事に出かけた。急に苦力たちが騒ぎだし、運転席の屋根をガンガン叩く。敵襲だ。エンジンの音で運転席では飛行機の爆音が聞こえなかったのである。

この場合は先ず苦力たちを逃がさなければならない。ヌシと二人で指図しようとしたがもう間に合わない。真上の空から今まで見たこともない大きな爆弾が我々に向かって真っすぐ落ちてくる。二人でトラックの陰に伏せ首を縮めた瞬間、爆弾はそれこそ 5 メートルくらいの近いところに「ドシン」と落ちた。しかしそのまま音がしない。変だな、と思ってよく見ると、それが不発のドラム缶爆弾であった。この頃になると敵方も爆弾が不足しているらしく、苦し紛れにドラム缶に火薬と油を詰めた爆弾を使うようになったようだ。何れにせよ不発でよかった。

このように、この戦争期間を通じ、私は何回か「もうダメだ」と思った瞬間、助かった経験をした。私は亡き母が守護神となって守ってくれている、と当時思ったし、今でもそう思っている。

(中略)

主計部の宍戸大尉や江尻中尉に頼まれて、ミナハサ大学の講師をしたことがある。「大学」とは大げさだが、インドネシアの若い吏員などの教養を高めるため適当なテーマでしゃべってくれとの趣旨で、教室を設けたものである。私は「東南アジアアウタルキー」をテーマにわかりやすく話したつもりでいたが、彼らにとってちんぷんかんぷん、どうも自分の独りよがりであったようだ。テーマの選択を誤った。

以前、メナドにあった料亭「隅田園」も、このトンダノに移設されていた。隅田園はもともと海軍士官専用で、あとから上陸した陸軍は遠慮して佐官以上しか利用しなかったようだ。一般邦人もある程度の幹部クラスだけが利用した。芸者は 8 人くらいいたが、その頃になるといざというときに備えて看護婦教育を始めた。

ある日のこと、苦力を満載したトラックが隅田園のすぐそばで空爆された。腕が飛び、足が傷つき、惨憺たる光景となった。そのとき、芸者たちが救急箱を片手に飛び出し、薬を塗り包帯を巻き応急手当を施した。しかもまだ空爆が続いている最中である。男性でもなかなかできないことで、見事、大和なでしこの花を咲かせた。

戦局は日に日に切迫してきた。沖縄戦もはじまった。私にも陸軍から赤紙が3回きた。現地招集である。だがそのたびに「海軍要員」であるとして、海軍が断ってくれた。

7月下旬になると、毎日新聞の広瀬支局長はよく「日本はもう負ける」と言い出した。もちろん何らかの方法で彼はニュースをキャッチしていたのであろう。ただ、どんなことがあろうと本土決戦がないかぎり日本は絶対に頭を下げない、と信じていた私は「馬鹿にするな、この敗戦主義者め」と心の中で思っていた。私自身は、戦争の決着はまだ先のことだと思っていた。

8月7日、日本側は民政をインドネシア側にゆずり渡すことにした。しかし、どうしてももう少し早くできなかったのか。せめて昭和18年11月の「大東亜宣言」の時であつたらどんなによかつたか。

インドネシア側の要人を集め、譲渡式を行った。

国旗は紅白の2色旗

国歌は「インドネシア・ラヤ」

上が赤、下が白のインドネシアの国旗は、オランダの占領下、彼らが隠れて約束していた旗であり、インドネシア・ラヤ（大インドネシア）もオランダ時代には禁じられていたが、日本軍が入って以後、大衆から大衆へ、口から口へと歌われ広がっていた独立歌である。

式のあと、インドネシア側の祝賀行進がはじまった。メラ・プティの国旗を高く掲げ、インドネシア・ラヤを合唱しながら行進は続く。驚いたことには敵機が襲ってきても動ぜず、歩武堂々と進んで行った。

この日はインドネシア人にとって最高の日であつたろう。帝国海軍部隊がこのトンダノの空に落下傘の花を咲かせてから三年半、私は日本がやっと約束を果たしたと思った。

第五部 敗戦 昭和20年8月より21年4月まで

敗戦

この戦争の最終段階で、陸軍は南方に駐屯する全兵力をシンガポール（昭南島）に集めて一大勢力を結成し、これによって敵の本土上陸を牽制しようとした。

これに呼応してミナハサ地区でも女子、老人および一部海軍関係者を除く一般男子全員を陸軍が召集し、先日来続々と南下させていた。徒歩でセレベス島の南端まで行き、そこからジャワに渡って、シンガポールを目指すという壮大な作戦である。私は海軍に必要な者として現地に残っ

た。

8月15日、この日も朝からカンカン照りで厳しい暑さの中、わが友藤沢少尉の指揮する小隊が出発した。

それを見送って私は事務所に帰り、書類を書いていた。経済機構をインドネシアに移譲する際の、実業団団長としての挨拶文である。これは先日の民政移譲につづく措置であった。

あと2行書けば終わるというところまできて、向かいの宣撫班の建物から「南洋新報」記者の関君が飛び込んできた。

「大変だ、大変だ。いま、ラジオで天皇陛下が詔書を読まれている」と。えっと言ったまま私は二の句がつけなかった。「早く、早く。戦争が終わったのだよ」。

「もういい」と、私は断った。茫然となった私は、怒ることもなく嘆くこともなく、また泣くことも忘れて、ただ無気力な状態に陥った。手に持つ筆が重く感じられ、どうしても最後の2行を書くことができない。

「国が敗れて、あとに何が残る？」と思い、自暴自棄になりそうになった私が何とか持ちこたえられたのは、逆説的にいえば関君の存在であった。

彼は純粋な「水戸っぼ」で熱烈な国家主義者、天皇至上主義者である。敗戦の日から彼の眼は血走り、いつも短銃を持ち歩き、やけになっていつ自殺するかわからないような状態であった。

「どうせ死ぬのならもう一度日本を見てから一緒に死のう」となだめ、それから一週間、夜となく昼となく寝食を共にして彼が落ち着くのを待ったので、私が自棄になる暇がなかったのである。

皮肉にも、その関君に海軍当局は敗戦を告げるインドネシア語の公示文を書かせた。彼はインドネシア語のベテランである。悔しかった彼はそこで次の内容の公示文を作成した。

「米国と英国からの依頼により、日本はこのたび戦争を中止することにした」と。この文章を彼は高級文語体のインドネシア語で書いたので、軍はその内容がわからなかったのかそのまま印刷し、要所要所に掲示した。あるいはわかっている知らぬふりをしていたのかも知れない。

この公示文を見て日本が勝ったと思ったのだろう、「ニッポンバンザイ」と叫ぶ現地住民もいた。

敗戦となったので一般邦人の召集は解除することになり、軍は私に先ほど出発した一般邦人を連れ戻すよう依頼してきた。私は喜んでトラックで彼らに追いつき、40名くらい詰め込んで連れ戻した。連れ戻す途中でキニローという天然硫黄温泉のある土地があり、そこで休息、久しぶりに戦塵を洗い流させた。そこから解散地であるトンダノの司令部に行く途中、近くに家や事務所がある者はどんどん自由に帰した。少しでも早く休息させたいと思ったからである。

この措置を大変に喜んだ人がいた。この人は、腕っぷしの強い倶利伽羅紋々の土工で、除隊の際に相当量の軍人用煙草を強引に持ち帰ったようである。後日、私が隅田園に来ていることがわ

かると彼は必ず芸者にタバコ10箱を持たせて寄こした。除隊のときの私の措置に感謝し、彼なりに仁義を切ったつもりであったろう。

戦争が終わった日から連合軍が上陸してくるまでは1か月くらいあった。兵も官も民も一緒に生きる目標を失い、ただただ虚しい日が続いた。

脱走してインドネシア独立を名目に一戦交えようと意気込む者、戦犯に指名されるのではと落ち着かない者、食料と土地の女を抱えて山中に逃げ込む者、やけ酒に溺れる者、自殺する者もいた。

武器は放棄しなければならないので、兵たちは菊のご紋章を削りとった。私も短銃と日本から持ってきた日本刀を庭先に埋めた。

隅田園は毎夜大入り満員であった。敗戦だというのに不謹慎だ、と思われるかもしれないが、大した用事もなく不安な生活が続くと酒でも飲むより仕方がない。酒は椰子酒で、その頃も配給組合から配給していた。次第に強い酒でないと皆が満足しなくなり、30度から40度、50度へ度数が上がった。酒に弱い私もこんなに強い酒が飲めるようになった。こちらのグループ、あちらのグループと、飲んでいくうちに次第に入り乱れてしまって、だれが代金を支払ったかわからない。少なくとも私は代金を支払った覚えがない。誰かが支払ったのだろう。

配給組合の物資の在庫はほとんど無くなっていたが、織物類は大事に扱ってきたので多少は残っていた。これを連合軍に引き渡すのもしゃくなので、私はインドネシア独立主義者に渡す決意をした。彼らは反オランダ、すなわち親日派であるから連合軍が上陸すれば必ず捕まる。それで、逃亡する場合の資金や留守宅の生活費の一部に充てさせるため、織物を数反ずつ彼らの家庭に届けさせた。当時、織物は非常な貴重品であったので、必ず役に立ったことと思う。

前に書いた「倶利伽羅紋々」の土工が死んだという。彼が暇つぶしに仲間と博打で遊んでいたとき、大負けしたのでよっぽど悔しかったのだろう、外に飛び出し、ダイナマイトに点火して抱えてきて「俺はこれを賭ける」と相手を押さえつけ、二人でそのダイナマイトの上にかぶさった。見ていた人は驚いて家を飛び出したので無事であったが、本人と相手の男は粉々に飛び散り、一片の肉切れもなかったらしい。帰国を目前にして、あたら人生を何と粗末に扱うのだろう。知っている人だけに何とも切なく、本当に残念でならなかった。

メナド警備隊指揮官の湯村大尉が最後に司令部に打ち合わせにきた日、彼はいつもの通り私の家で休息したが、そのとき、金側の腕時計を洗面台に忘れていった。これが遺品となったので後日内地へ引き上げた後、藤沢君に頼んで千葉の湯村大尉の実家に届けてもらった。戦争犯罪人として銃殺になった彼が残した唯一の品であったかもしれない。

配給組合の監督頭であったヌシから、火祭りをするのでぜひ見に来てもらいたい、との招待を

受けた。私にとって久しぶりのメナドである。

組合事務所があった場所ちかくの林に大勢の人が集まっていた。暗闇の中、真っ赤なたいまつが燃えあがり、その周りで人々が飲み、食い、歌い、踊っている。どんな気持ちで彼らは踊っているのだろうか。平和が戻ったのでその意味ではもちろん大いに喜んでいるにちがいない。私は黙って、燃え上がる火と、踊る彼らの姿をみつめていた。そこに、顔見知りの華僑のタウケ（旦那）が寄ってきた。

「これからうまく行くよ」。「うん？」と私が尋ねると「今までは車の輪の大きさが違っていた。中国の車輪は小さく、日本のそれは大きすぎた。これでは車がうまく走れるわけがない。今、両方の車輪の大きさが同じになったので、これからうまく走れるよ」と。

彼は私を慰めようと言ったのだろうが、この言葉に私は「ガン！」と頭を叩かれた思いがした。本当に日本は負けたのだ、と痛切に思った。この言葉と、後日、収容所で聞いた蒋介石主席の「仇に報いるに徳を以てせよ」という言葉の中に、私は中国人の心の大きさを感じ、これからの日本人はもっと謙虚にならなければならないと思った。

(中略)

連合軍の上陸が近づいたある日、私は中野ペンデを慰めようと彼の家を訪ねた。彼は戦犯を意識してか日常会話に乗ってこらず、いらいらして機嫌が悪かった。私が「通訳というのは本来無人格であり、話した内容には責任はない。その行為は戦時国際法上では罪にあたらぬ」といくら説明しても、彼は「彼らは通訳でも必ず戦犯にする」と断言した。私はそれ以上返す言葉もなく彼の家を引き下がったが、それが彼を見た最後となった。

とうとうわが家の使用人たちと別れなければならない日がきた。私によく尽くしてくれた彼等！ 下男頭から一人ずつ順番に私の部屋に呼んで別れを告げ、軍票は価値がさがっているので私はこの日初めて職権を乱用して布地を添えて手渡した。

下男たちは眼を下に落とし唇を噛む。

女中のマリーに「テリマカシーバニャック」と別れを告げると途端に泣き出し、「私はトアンの行くところについていきたい」。それはできないことだと言うと、「私がいなくてだれが食事を作り、だれが洗濯するの？」と言う。どうもこの敗戦という事実をマリーはよく呑み込めていないようだ。

それにしても私がトンダノに来て彼女に手伝ってもらうようになってからわずか4カ月に過ぎない。布地などと交換すれば簡単に食料は手に入るのだが、私は立場上そういうことは一切させなかった。彼女は時々父親の畑から野菜や鶏を運んできて、居候を含む10数人のわが一家を支えてくれたことを私は知っている。台所に下がっても泣き続けるマリーの心情を思って、私のほうこそ泣きたい思いであった。

遂に占領軍が進駐してきた。オランダとオーストラリアの連合軍である。即日、戦争犯罪人は捕
捉された模様である。私に関わりあった戦犯容疑者は、わが社の中野ペンデ、南洋拓殖の柳井支
店長、海軍の山田兵曹長および湯村大尉である。前の二人は通訳であり、連合軍はやはり通訳の
無人格は認めなかったようだ。山田兵曹長はオランダ人男子捕虜収容所の管理責任者であり、湯
村大尉は言うまでもなく上陸作戦当時の責任者である。

浜崎司令と高崎副長も姿が見えなくなったが、これは連合軍との折衝のためであったようだ。た
だ、私が聞いたところでは、浜中少将が丸腰で交渉の部屋に入ったとき、連合軍の兵隊たちは窓
のそばに腰を掛けたまま、ピーピーと一斉に口笛を吹き、冷やかしたそう。敵将を迎える態度
ではない。少将はどんなに無念であったろうか、察するに余りある。

その当時、隅田園の芸者たちは看護婦教育を受けていた。ある日、病院勤務の兵隊さんが「桃太
郎」という名の芸者からの手紙を持ってきた。彼女は女将から「あなたは前借金がまだ二万円残
っている。これは内地に帰ったら必ず返してほしい」と言われたらしい。そこで私に対して「何
とかその二万円の都合をつけてもらえないだろうか」と依頼してきたのである。

私と桃太郎の関係だが、彼女は女将から命ぜられて私専属の芸者になっていた。私が飲みにいけ
ば必ず彼女がつく。酒に弱い私は、酔ってたびたび彼女の部屋に泊まり込むこともあったが、天
地神明に誓って彼女とはそれ以上に関係はなかった。ある夜、宴席で高崎副長が私を掴まえて「小
坂は変態だ」という。反問すると「ベッドで芸者と同じベッドで寝ながら何もしないのはおかし
い」と。副長は女将の彼氏で、桃太郎の隣の部屋。どうも、空襲で被害を受けた壁の穴からこち
らを覗いていたようだ。

桃太郎とはこのように特別の関係はなかったが、なんと言っても付け人として大変親切に世話に
なった。また当時、私は例のあぶく銭をたくさん持っていたので、喜んでお金を持たせた。ところ
がこの行為が後日私の命を救うことになるとは、世の中、先のことはわからないものである。

連合軍はビトゥンを中心に三カ村の住民を立ち退かせて、そこを日本人俘虜収容所とした。戦地
で捕まった者は当然「捕虜」だが、私たちは負けたのではない。国の命令で自由を拘束されるこ
とになったので、「捕虜」ではなく「俘虜」だと思う。まあ、どちらでも同じだが。

収容所の周囲の密林を幅数十メートルほど切り払い、通る者はすべて射殺する態勢を作った。軍
人、一般邦人は次第にこの収容所に移っていった。その折、オランダ軍というより「アンボン軍
曹」に相当過酷な扱いを受けた。

前進司令部は別にして、連合軍と言っても私どもはオランダやオーストラリアの正規軍を目にす
ることは少なかった。私どもを直接監視し命令するのはほとんど、オランダの傭兵アンボン族で
あった。

アンボン族は、香料の産地として有名なセラム群島を中心地アンボン島の出身で、頑強な体力、

剽悍な性格はインドネシア諸民族のなかで群を抜いている。オランダ軍はよくアンボン族を兵・下士官として使った。柔和なミナハサ族とは性格が全然ちがう。

ある日、あまりの過酷さにととうとう一人の兵隊がトラックから飛び降り、そのトラックの前の地面で大の字になって「さあ、殺せ」と、本人は言ったつもりだが、これをインドネシア語で「サヤ ボレ マティ」と叫んだらしい。和訳すると「私は死んでもよい」となり、これではさっぱり迫力がなくドスがきかない。アンボン軍曹もわけがわからず、邪魔者だとして押しのけて通ったという。何ともおかしく、また悲しいことか。

ほとんどの日本人はビトンの収容所に入り、トンダノには何人も残らなくなった。私は民需物資を連合軍に引き渡す任務があり、一人残った。

ある日、オランダの中尉が物資を引き取りにきたので各倉庫に案内したが目ぼしい物は何も残っていない。最後の倉庫に大きな樽だけが残っていた。

「これは何だ？」と聞くので「日本人の食べ物だ」と答えると、「開けなさい」と迫った。「本当に開けてよいか」「よい。構わないから開けなさい」と言う。そこでヨーシとばかりその樽の蓋をあけた。とたんにプーンと鼻が曲がるようなものすごい味噌の匂い。中尉はあわてて「もういい」と言うので「本当にもういいか」とわざと念を押す。「もういいから早く蓋を閉めてくれ」と、鼻を押さえながら言った。そこで私はゆっくり蓋を閉めた。

ビトゥン俘虜収容所

トンダノでの任務を終え、私はビトンの収容所に入った。正確な人数は把握していないが、この収容所には陸軍 2,000 人、海軍 1,500 人、一般邦人 500 人、合計 4,000 人くらいが収容されていたと思う。

はじめのころは司令、副長ともにいなかったもので、北川という少佐が海軍・一般邦人の最高責任者となった。たいへんおとなしい人柄で、この重責はお気の毒であったが、しばらくして浜中司令、高崎副長が戻ってきた。

わが社の宿舎に指定されたのは居間 2 室に小さな食堂、台所がついたこじんまりした家であった。そこにわが社の 7 名のほか、佐伯さんとその部下の三谷君、南洋林業組合の大山支店長と斉藤君、それに南洋新報の関君まで居ついたので総勢 12 名となり、この小さな家は手狭であった。

さっそく藤沢君が得意の大工仕事で、まず稲垣支店長の個室を作り、次に私と彼の二人用のベッドルームを作った。関君がいつの間にか私の部屋の天井裏に住みついた。他の人は大部屋である。家の前にアマリリスを 1 本植え、その周りを芝で囲んだ。緑の芝と赤い花のコントラスト・・・収容所の中では一番しゃれた庭となった。藤沢君のセンスのおかげである。

わが社の宇野君と三谷君はインドネシア人そこのけでスルスルとヤシの木に登れる才能がある。それで、収容所内のサトウ椰子はすべてわが社で押さえることになった。砂糖は収容所内で貴重品であるので、わが社で独占製造して海軍病院に納入するのである。サトウ椰子の若い花茎を切

って、一晩かけてサグエル（糖液）を貯め、翌朝それを二人で回収する。そのサグエルを大釜に入れて、大山さんがゆっくり煮詰めて砂糖をつくった。

稲垣支店長はタバコ畑作りに精を出していた。

連合軍からの米の配給は少ない。少量の米に野菜の葉っぱをまぜて雑炊にして食べる。その米も近い将来配給を停止するので自給自足せよ、という連合軍の方針であった。

我々は手っ取り早い方法として「芋」を植えた。これならすぐ芽が出て食べられるし、4カ月もたてば芋の収穫が見込める。この方法が最も安全だと思った。

贅沢にも蕎麦を植えたグループがあった。もちろんこれがうまく行けば大成功だが、土地・気候のせいかな成果はゼロであった。日本への引き揚げがもう少し伸びたらこのグループは何を食べていたろうか。

連合軍と連絡をとるための前進連絡所（司令部）が設置され、その連絡要員として海軍は私を指名したが、会話不得意であるので辞退し、代わりに米国の農業大学を卒業した佐伯さんに頼んで行ってもらうことにした。彼は責任者の高崎副長といっしょに毎日のように出向するようになった。

高崎大佐は、鹿児島・島津家の家老格の家柄の子孫で男爵。英国ケンブリッジ大学卒業、バリバリのキングスイングリッシュで話す。オーストラリア人の百姓英語では及びもつかない。その貫禄の差で、後になると相手（連合軍）の将校の方から先に挙手の礼をしたという。

佐伯さんは長身、当時のアメリカの俳優アドルフ・マンジュウによく似たいい男で、米国女性によくもてた（と、当人は言う）。その佐伯さんが我がグループであるため、連合軍将校がちょくちょくわが家の庭先に来るのは閉口したが、向こう側の様子がよくわかった。

前進司令部にはオランダの国旗が掲げられ、日本人は必ずこの旗に対して挙手の礼をとらなければならないが、オーストラリア兵は日本人に向かって「あんな旗に敬礼しなくてもいいよ」と言っていて、オランダを多少軽蔑しているように見えた。この戦争で勝利を得たのはオランダ軍の力ではなく、自分たちのおかげではないかという自負があったかも知れない。

（中略）

戦争に負け、国の力が及ばなくなる— ということがどんなに心細いものであるか。これは戦地で実際に経験した者でなければわからないだろう。踏まれても、蹴られても、殺されても抵抗できない。ただ、歯をくいしばって我慢するより仕方がない。満州で終戦をむかえた多くの婦女子は皆そうであっただろう。平和な時に人は国のありがたさを本当にわかっているのだろうか。

ありがたいことに、ビトゥン俘虜収容所では食料の不安以外にはさして過酷な扱いはなかった。兵隊さんは交代で港の荷役にかり出されたが、強制奴隷的労働は一切なかったし、一般邦人にはその労役もなかった。

戦争が終わったとき、山中へ行方をくらました逃亡兵が 10 名ばかり戻ってきた。本来は逃亡罪に該当するところだが、浜中司令は「ご苦労さんでした。ゆっくり体を休めなさい」と、温情的な言葉をかけた。衣服は破れ、ひげぼうぼうの彼らの姿を見ては何も言えない。私の隣人であった沖縄出身の金城さんもこのときいっしょに戻ってきた。

一般住民とは完全に隔絶されたはずのこの収容所であるが、どこの世界にも裏があるように、ここでも要領よく原住民と接触し「トッカル、トッカル」と言って物々交換する者がいた。衣服などと交換して、野菜、卵、タバコなど多少は手に入れていたようだ。しかし、もちろんその量はたいしたことはない。

あるとき、兵隊さんが猿を捕まえたと言ってその片足を以てきてくれた。久しぶりの肉だが、猿だからそのまま煮たら黄色いあぶくが出るだろう。カレーにしたら同じ黄色だからわかるまい、とカレーライスにした。全然まずくて、食べた代物ではなかった。

誰かに追いかけられたのか、大トカゲがフラフラになってわが畑に逃げ込んできた。窮鳥？ふところに入ったので殺した。これも久しぶりの肉だ。そのまま食べるのはもったいないので野菜に煮込んだ。その野菜にしみ込んだ肉汁の何とうまいことか。皆、久しぶりで堪能した。

いちばん若い灰原君を「帰国したら手に職をもっていた方がよい。それには理髪が良い」と皆でそそのかして散髪をやらせた。これが幸いして、帰国後彼は神戸で本当に理髪店を始めた。

「内地では戦後はすべて民主主義だ、デモクラシーだ」というので、ここビトンでも一般邦人の村長を選挙で選ぼうということになった。投票の結果、わが社の子会社「南太平洋貿易」の支店長がえらばれた。「村長として誰が適任か」という基準で選んだのではなく、自分の会社の支店長やグループの長に投票したので、沖縄県人の漁夫を多くかかえている「南太貿」の支店長がえらばれたのだ。選ばれた支店長もとまどって、結局、村長としての仕事は何もしなかった。「民主主義の正体見たり枯れ尾花」の感がする。(今の日本の政治も同じようなものか)

主計部の人たちが中心となって「ビトンニュース」を発行した。それに載った穴戸大尉作の川柳―

「ヘルメット かぶればまるも いい男」

この「まる」は私のあだ名で、まるもの「も」が気に入らない。

女性は事務員も芸者もすべて看護婦になって病院に勤務していた。ある日、陸軍の兵隊さんがトラックで病院前を通ったとき、首が病院の方を向いたまま元にもどらなかったという。何年ぶりで日本の女性を拝んだためであつたろう。

連合軍からの指名で拘引される者が出始めた。戦争犯罪人として調査のためだ。今日はこちらのキャンプから、明日はあちらの隊からと、一人ずつ指名されるので不気味である。戦犯に指名されるのは、主に捕虜の取り扱いに関係する場合と、現地住民からの投書によるようだ。私もオランダ人捕虜収容所への食糧配給の責任者であったからちょっと気にかかったが、捕虜に対しても現地住民への配給量と全く同量を配給していたので、調べられても何とか言い逃れできると

思った。現地住民からの摘発の投書については全く心配しなかった。

(中略)

酷暑の中の慣れない畑仕事で、私は病に倒れた。マラリアである。

数日間寝ていたが、その間わが社の誰も畑に出ず、麻雀をしたりして適当に遊んでいた。それでは将来必ず困ることになる。少し気分がよくなったので皆を「畑に行こう」と誘い、率先して鋤をにぎりショベルを使った。これが悪かった。その日のうちに私はぶっ倒れ、ベッドに担ぎ込まれた。ものすごい高熱で気を失った（あとで聞くと42度5分あったらしい）。私は数日間ほとんど気を失っており、たまに気がついて頭の中をのこぎりで切られている思いであった。

この数日間をほとんど寝ずに看病してくれたのは桃太郎であった。彼女は看護婦として病院勤務中であり、外出は禁止され、いわんや外泊は厳罰を受けるはずだが構わずに泊まり込みで手当てしてくれたのである。また佐伯さんは「エノチン」というドイツ・バイエルン社製のマラリア特効薬を自己用として隠し持っていた。それを惜しげもなく私に飲ませてくれた。これが効いた。だが少し良くなると今度はものすごい下痢だ。アミーバ赤痢である。便所で用を足し、立ち上がるとまたすぐ出たくなる。お腹の中は空っぽで、出るものはなににもない。その繰り返しで、どんどんやせていった。

数カ月前に、私は他社の北村君という友人が熱帯性マラリアとその後のアミーバ赤痢に罹っているのを知った。見舞いに行ったときはもう死んでいた。顔も身体もやせにやせて、あばら骨は飛び出し、顔は骸骨そのもので眼は飛び出していた。その北村君のあわれな姿を見ているだけに、私は何としても体力を取り戻そうとがんばり、1か月後にやっと回復した。皆のおかげであり、とくに佐伯さんと桃太郎は命の恩人である。終生忘れまい。

ビトン収容所は海沿いにあるので塩には不自由しなかったが、砂糖は、わが社で独占的に作っている病院用の椰子砂糖しかない。平時では果物その他で糖分は結構摂取しているのでわからないが、糖分を全く摂らないでいると精神的におかしくなり、気が荒くなる。

宇野君たちがサトウ椰子の樹上で貯めたサグエル（糖液）が狙われた。夜半に樹上で盗まれる事件が起こり、それ以来警戒を厳重にした。

一番残念であったのは、稲垣支店長が大切に、それこそ我が子のように大切に育てた煙草の葉が、一夜にして根こそぎ刈り取られたことである。明日はそろそろ刈ろうと思ったその夜のことで支店長の悲しそうな顔は見ておれなかった。われわれもあてにしていただけに悔しくてならなかった。

浜中司令の姿がいつの間にか見えなくなった。きっと連合軍に拘引されたのであろう。高崎副長は責任者として残っていた。

ある日のこと、大きな歓声とともにインドネシア人が乗ったトラックが2台、収容所に飛びこんできた。メラプティ（紅白）のインドネシア独立旗を押し立てて満面の笑顔。彼らは連合軍を追っ払ったのである。インドネシアの独立だ。おかしいことだが、それを報告するために彼等は我々のところに挨拶にきたのである。彼らの方から挙手の礼だ。

何はともあれ我々も大喜び、インドネシアバンザイ！ 心から拍手喝さいを彼らに贈った。しかし、その喜びも長くはつづかなかった。連合軍の反撃でたちまち元の態勢に戻ってしまった。

日本へ帰還のうわさはたびたび流れた。収容所で皆が一番熱中する話題は、ふるさと自慢、日本の食べ物話、そして帰還のうわさ話だ。来年には帰れるだろうと希望的観測をする者、いや、現在のわが国の船舶保有量では早くても5年はかかるだろうと主張する人もいた。

気分なおしに演芸会でもやろうということになり、兵隊さんは張り切って舞台を作った。私はその夜宿舎のベッドで寝ていると、久世さんのソプラノがかすかに聞こえてきた。久世さんは女学校の音楽教師として赴任してきた人で、「教会用に必要」という理由で連合軍と交渉し、強引にピアノを収容所に持ち込んだ人である。そのピアノの弾き語りで久世さんのソプラノが聞こえる。曲は「帰れソレントへ」だ。時が時、所が所だ。この収容所の暗闇の中、椰子の葉越しにながれてくる「帰れソレントへ」の旋律は私の心の奥をかきむしった。

(中略)

さらばメナド

長ければ5年はかかると覚悟していた収容所生活は、昭和21年（1946）に入ってから引揚げの噂がとびかい、やがて4月に正式に引揚げが決まった。アメリカが大量の復員船を準備してくれたおかげである。

さあ引揚げだ！ で収容所内は大騒ぎ。大して持って帰る物はないはずだが、皆はまず背負い袋を用意したり作ったりした。違反品を隠し持っていることが見つければ全員が足止めを食う、と通達されたが、それでも石鹼を溶かしてダイヤモンドを隠した人もいたという。

4月25日、出発開始。私どもは収容所の広場に集合した。

「気を付け！」「カシラ中！」「00殿に敬礼！」オランダの将校に敬礼したが、なんと号令をかけたのは日本人で、しかもすべてオランダ語だ。何という屈辱。

「直れ」「右無け右」「前へ進め」

オランダ語であっても自然に意味はわかる。「クソッ」と思ったがこれでおさらばだ。メナドまで約40キロの道のり、我々は徒歩で行進をはじめた。途中の坂道で中年の男の人が一人倒れている。見ると、大きなワニ皮を背負って汗びっしょりである。「国が敗れたというのに何という欲たかりか。どうせ取り上げられるのに」私は腹を立てたが、皆も同じ思いか誰もその男に手を貸そうとしなかった。

やがて、途中のキャンプ（仮宿泊所）に着いた。入口でアンボン軍曹が仁王立ちしており、私たちは一人ずつ氏名を申告、手荷物検査を受けた。私は会社の大切な書類を持っていた。それはアムラン農園の権利書で、オランダ語で書かれた大正 8 年発行の書類である。

「Can you speak English ?」私を睨みつけ、いきなりその軍曹は英語で問いただしてきた。とっさの判断で私はわからないふりをして頭を左右に振った。

「ボレカ ビチャラ バハサ インドネシア ?」（インドネシア語は話せるか？）全然話せないというのかえってまずいと思い 「スディキット」と答えると、今にも私に殴りかからんばかりの姿でにらみつけた。やがてその書類を押収品の山に放り投げ、「行け」と怒鳴った。（この権利書は後刻、佐伯さんが押収品の中から偶然見つけだしてくれたので、私は本社まで持ち帰ることができた）。

台湾銀行の山田支店長が氏名を名乗ったとたん、「何っ ヤマダ?」と、近くにいたアンボン兵が皆駆け寄り、山田さんを取り囲んだ。これには訳がある。

戦犯として拘束された山田兵曹長はオランダ人男子捕虜収容所の管理責任者であり、彼らの中では最も悪名が高く、憎まれていたのである。日本人には山田姓がたくさんいることを彼らにわからせるのに相当に時間がかかった。

その夜はこのキャンプで一泊。翌日、アンボン兵が 2、3 人現れ、私物検査と称して、時計、万年筆、指輪などを略奪していった。

メナドで私の隣人であった金城さんが戦犯に指名された。「自分は何もしていない」と言って大きな体で泣く。彼は終戦間際に海軍特警の補助通訳の仕事を命ぜられていたのである。

「通訳は本来、犯罪には当たらないし、まして君は補助員だ。大丈夫だから身体に気を付けて頑張れなさい」と、慰めにもならない慰めを告げたが、彼のような立場の人は本当に戦争の被害者だ。

夕方、キャンプを出発。私と藤沢君は要領よく荷物運搬のトラックの荷台に便乗できた。

「小坂君、見ろよ」藤沢君の声で見上げると、並木の真上に月が出ていた。まん丸の明月である。思えば戦に明け暮れて、しみじみと月など見たことはなかった。椰子の葉越しに眺めたこのまん丸の月はいまでも忘れられない。

この日、海軍の将校は全員一列に並ばされて、一人ずつぶん殴られたとのこと。勝てば官軍か。

27 日から 28 日にかけて陸、海軍、一般邦人が順次乗船した。メナド港沖合にアメリカのリバティ船が 2 隻待っている。

海軍の責任者である高崎大佐とともに、私は海軍から処理を依頼されて埠頭に残った。それは、日本人と同棲していた現地女性が日本行きを希望するケースの調整の問題であり、この調整は難しかった。両日で 40 名から 50 名くらいのインドネシア女性が埠頭に入ってきた。中には涙をこぼしながら裸足でやってきた気の毒な女性もいる。

私は乗船前に話をつけていない相手に腹をたてていた。そこで私がとった調整の仕方は次の通り

である。すでに乗船している相手を一人ずつ指名して呼び戻し、「別れるならわかれる、連れて行くなら連れていくとちゃんと話をつけなさい。話のつかない人は連れていきなさい」と言って話し合いをさせた。その結果、大部分は別れることになったが、それでも10人くらいは日本に同行することになった。

栈橋から4、50メートル離れたところに鉄柵がある。そこに並んだ、並んだ。多数の見送り人に混じって私の使用人たちが見送りに来ている。ヌシもいる、ガイシもいる。30キロ離れたトンダノからマリーも来ている。男も女も皆、チャンと正装している（彼らの正装姿をこのときはじめて見た）。彼らは私に向かって「トワンコサカ」「トワンコサカ」と別れを告げる。返事をしやうりたいが現地住民と直接会話することは禁じられている。私の横にはマンドリン（自動小銃）を抱えたアンボン兵が睨んでいる。仕方がないので私はただ眼だけで合図し、小さく頭を下げた。これはうるさい、と思ったのだろう。翌日は見送り人を鉄柵から完全に締め出し、私は彼らと顔を合わせることができなくなった。

その埠頭には私が使っていた苦力が10人ばかりいた。その一人がそっと近づいてきて「トアン、あそこに水があるよ」と、水道栓のある場所をそっと教えてくれた。カンカンの日照りの中、これは助かった。

最後に高崎副長が拘束された。ここまで彼をフリーにしていたのは、日本軍の動揺を抑えるための連合軍の巧妙な手であった、と思う。

最後のランチに私一人が乗ったそのとき、私が使っていた苦力たちが栈橋に直立して一列横隊に並び、おどろいたことには一斉に私に向かって拳手の礼をした。肘をちょっと上げる日本海軍独特の拳手の礼だ。涙の出る思いでわたしもすかさず礼を返した。

あの拳手の礼はきっと予め打ち合わせていたのであろう。そうでなければあの瞬間にキチンと一列横隊に整列して礼を送ることはできない。おそらくあのあとに彼らはアンボン軍曹から厳しく咎められたであろう。その処罰覚悟の行動であったに違いない。そしてあれは私個人だけに対する敬礼ではなかったと思う。私を通して、去っていく全日本人に対する敬礼であったに違いない。私は涙ぐみながら、彼等の姿が見えなくなるまで答礼を続けた。

ランチが引揚げ船に近づいたとき、コトコトと音がして舟底から苦力の少年が顔を出した。「なんだ？」と聞くと、「トアンを見送りにきた」と言う。そして「今度はいつメナドに来てくれるのか」と言うので、「ナー二、この戦争はちょっと中止しただけだからあと1年もすればまた来るよ」と答えたら「そうか、そうか」と本当にうれしそうに無邪気な顔で笑った。

あの日から50年！

今でもあの埠頭の鉄柵にもたれて泣いていたマリーや、大声で私の名を呼び続けた多くのインドネシア人、栈橋で一斉に敬礼した苦力たち、そして最後まで見送ってくれた少年の笑顔が目につ

かぶ。これらの人々を終生忘れないだろう。

第6部 帰郷 昭和21年5月

リバティ船

汽笛の音もなく、船は静かに港をはなれた。万感の思いで「さようならメナド」と心の中で叫びながら、遠ざかる陸岸や遠くの山、暮れなずむ空を見つめていた。

このリバティ船はアメリカの配慮で復員船として大量に回してくれたものである。この配慮がなかったら数百万人の日本人は各地に点在する収容所で苦しみ、さらに数万人の犠牲者を出したことであろう。

戦後、アメリカが敵国であったわが国に贈った「ララ物資」も思い出す。このおかげで沢山の人が助かった。これはアメリカの宗教団体と労働組合からの贈り物であった。

昨今、沖縄をはじめ各地でアメリカ兵による理不尽な行為がときどき起こる。そのたびに私はリバティ船やララ物資のことを思い出し、胸を押さえることにしている。

リバティ船の甲板員、機関員など、乗組員はすべて日本人であった。その日本人乗組員の顔や肌の色の何としろいこと。まるで白人のようだ。日本人はこんなに白かったのかと驚いた。3、4年南洋で生活しただけで顔色がこんなにも変わるものであろうか。

この船員たちに日本の状況を聞いた。いちばん聞きたかったのは風物のことではない。日本人の心がどう変わったのかが私の一番の関心事であった。

船内の食事は乾パンを主食とし、ひどいものであった。友人が持ち合わせたチーズの小さな缶、もったいないので各自が楊枝の先でちょっとだけチーズを削って乾パンにつけて食べたが、そのチーズの旨いこと。

何かの必要があったのであろう。リバティ船はモロタイ島沖で一時停泊した。夜で、月が出ていた。我々はこの島にあるという戦犯刑務所を偽悪的に「モロタイ大学」と称していた。そのモロタイ大学生である中野ペンデをはじめ、湯村大尉、山田兵曹、柳井支店長、金城君その他の戦犯容疑者となった多くの人々は、今、この目の前に黒々と横たわっている島にいて、今夜の月をどんな気持ちで見ているのだろうか。我々はこのまま真っすぐ内地に帰る。何とも申し訳ない気持ちになった。

後日私が聞いた中野ペンデの最後の様子。彼は「天皇陛下万歳」を三唱し、落ち着いた態度で立派に絞首刑（と聞いたが銃殺かもしれない）を受けたという。私の解釈では「天皇陛下万歳」とは「祖国万歳」と同義語であり、すなわち郷土を守る、親兄弟を守ると同じ意味である。

ビョウビョウたる海のかなたの祖国にむかって、爆撃や魚雷の心配が全くない平穏な航海が続

く。上陸地点は和歌山県田辺湾とのこと。船内では皆静かに到着の日を待った。

やがて、祖国の山や森、家々の屋根が見えてきた。何と黒々とした、なだらかな風景だろう。まるで水墨画の世界を見るようだ。極彩色の南洋の景色とはなんとという違いであろう。

田辺沖で停泊し、一夜が明ければ5月5日。今日は男の節句、いよいよ上陸の日だ。太平洋の水平線のかなたから大きな太陽が昇ってきた。焼野原と化した祖国を我々日本人は必ず再建するであろう。そして私は、残された自分の人生をそのために少しでも役立てたい。昇る真っ赤な太陽を見ながら、私はそのように心に誓った。

帰国して

下着以外はほとんど何も入っていない小さなリュックを背負い、一人当たりゆるされた200円の現金を握っただけで、私は焼野原の東京に放り出された。

まず、目についたのは道行く人々。男は戦地で青春を燃えつくしたのか、軍服や国民服姿で下向きに首を垂れてトボトボ歩いている。一方、女たちは概してまるまる太って元気一杯。そして米黒人兵の大ききはちきれそうなお尻だ。街を走る米国製の大型バスやジープ。まるで異国のようだ。

南洋興発会社を訪れ、帰国の挨拶とともに苦心して持ち帰ったアムラン農園の権利書を届けた。南洋貿易時代からの同僚である岩井君が私のことを気にかけて職場をキープしてくれていた。ただそこは北海道の油脂工場とのこと。暑い南洋からいきなり北海道では無理だと判断し、好意を謝して辞退した。

南洋興発の秘書課長は私の宿のことを非常に心配してくれ、「当分、栗林社長宅にいなさい」と、そこに案内してくれた。社長は出張不在中であつた。そのころ一般の人は飢えているのに、社長宅では三度三度、銀シャリ（白米）と立派な副食膳がでた。女中さんが「ご飯です」「お風呂です」と、下にも置かないサービスで、貧乏人の私はどうも腰が落ち着かず、一週間で勝手に社長宅を飛び出し、引揚者の施設に落ち着いた。それから人並みに苦労の日々がはじまった。

なかなか思ったような仕事が見つからないので、堀田君や藤沢君と貿易業を営むことにした。「株式会社ゼネラル・サービス」の社名で、一応私が代表者。昭和22年のことである。

サンフランシスコの米企業の代理店になると共に、香港やグアム向けの輸出を業とした。日本国内に数十ヶ所ある米国PXへ納入するため米軍中央購買局（C.P.O）とも取引を開始した。これは国内貿易である。

業種は手書きネクタイの製造販売である。若い画家10人ほどに働いてもらい、原材料はすべてC.P.Oから支給された。手間賃だけで多いときはワンオーダー200万円くらいになり、一時は大盛況であつた。この会社ではC.P.Oの軍属ミスター・グロス、米軍司令部通信担当のワーレン大佐、郵政省の中山電話局長、旧三菱商事の鈴木一夫氏などに大変世話になった。

事務所を新橋駅付近に置いたので、南洋で一緒であった友人、知人がよく立ち寄ってくれた。おかげで皆の消息がよくわかった。

南洋興発は進駐軍司令部から「国策会社」と認定され、それこそ算盤一丁も持ち出せなかった。退職金など論外である。私が苦心して持ち帰ったアムラン農園の権利書も没収され、水の泡と化した。

引揚げ後1, 2年はマラリアがたびたび再発した。布団を2, 3枚重ねて上から押さえつけてもらってもガタガタ震え、それが収まると発熱する。困った病気だ。

また、しばらくの間は飛行機の爆音やサイレンの音に身体が自然に反応して困った。

忘れ得ぬ人びと

昭和25年6月、朝鮮戦争が勃発するとともに私どもがP.Xに納入していた「手描きネクタイ」が贅沢品と認定されてC.P.Oは購入を中止した。何やかやで(株)ゼネラル・サービスは解散した。

その後、堀田君は海外旅行会社の営業部長として世界を股にかけて大活躍したが、若くして亡くなった。藤沢君は帰国して結婚した相手が横浜の資産家の娘さんで、その後、自社ビルやアパートを管理して悠々自適の生活を送っていたが、ガンで亡くなった。宇野くんは千葉でラーメン屋を自営、夜さびしくなると私のところへ長電話をかけてきた。酔って、20分も30分もかけてくるのは大迷惑。けれどもそのうちかけてこなくなってさびしい思いをしている。郭明生君は台湾から一度便りがとどいたが、こちらが忙しくしているうちに音信不通となった。兄上が確か台湾大学の教授をしていると聞いたが。

佐伯さん。京都で戦後、米兵を相手に「チョットマテ」というスーベニアショップを開業したが、青雲の志忘れがたく、戦前パラオでやっていた「養殖真珠」の仕事をタイで始めた。結果はうまくいかなかったようだ。

メナドにいるとき私に「ルリ」を買ってくれた青柳君は、長身でひげが濃ゆい風貌に似合わず気が弱く、指先をちょっとケガして出る血を見たら失神する有様で、我々は彼のことを「ヤマトヤサオトコ」とか「ヤマトナデオトコ」と呼んでいた。帰国して彼の家を訪ねたことがある。細君はやり手の美容師、彼は赤ん坊をネンネコで背負い、完全な髪結いの亭主になっていた。やはりヤマトナデオトコだ。

文才がある関君は、兜町の山種証券の調査部で活躍していたが、例の水戸っぽ気質が災いし、上司と喧嘩して飛び出してしまった。好漢、今何処に在る？

南洋の我々のグループであった斉藤君と三谷君は、ともに親孝行が動機で熱心な新興宗教の信者になったのは良いが、盛んに私を入信させようと勧誘するのには弱った。「小坂さんなら今すぐ幹部、将来は必ず国会議員だ」なんて言っていたが。

南太平洋貿易の細谷支店長は少し早めに帰国し、五反田で料亭を開いていた。稲垣さんといっしょに呼ばれてご馳走になったが、当時なぜか彼は「戦犯に指名されるおそれがある」とかで大

変びくびくしていた。

隅田園の女将が向島に立派な料亭を開店した。招待されてたいへんご馳走になったが、驚いたことにはその席にどてら姿の高崎副長が現れた。相変わらず女将の彼氏のような。話を聞くと、彼はジャワに拘引されたが、刑務所でも次の間つきで下男まで使っていた由、さすがの貫禄である。取り調べも適当に言い逃れ、早々に帰国できたとのこと。そのとき聞いた話では、浜中少将は8年の禁固刑の由。

隅田園といえば、私が見受けした格好の桃太郎は、北海道・余市の実家に帰って、りんごを一箱送ってきた。

主計部の穴戸大尉は、東大一内務省とエリートコースの人。防衛局長として国会で議員の質問に答えている姿をテレビで見た。同じ主計部の江尻中尉も東大卒。三井物産の社長さんにまでなった。同社のフィリピン支店長誘拐事件では現地に乗り込んで大活躍し、勇名を馳せた。

北川少佐には帰国早々丸の内会で会ったことがある。日立の社員で、「労働組合の資金集めですよ」と、鉛筆を売っていた。少佐殿も娑婆では苦労しているようだ。

麻雀の神様・毎日新聞の広瀬支局長は、新しく創刊された「スポーツ・ニッポン」の社長様だ。一升ビンが林立する小さな部屋を事務所として使っていたあのスポニチが、こんなに大きな企業になるとは！

以上のほか、まだまだ忘れ得ぬ人はいるが、それよりも何と言っても忘れ得ない人々は、あのメナドで知り合った心温まる多くのインドネシアの人々である。 (完)

—
ビトゥン捕虜収容所について（編集部付記）

ビトゥンの捕虜収容所はどこにあったか？

この小坂清見手記のほかにも抑留体験者何人かの手記を読んだが、収容（抑留）場所についてはあやふやな記述しかない。手記のほかにも、まだお元気であった青木さんに収容所の位置を尋ねたことがある。青木さんはご存じの通り陸軍の軍人としてニューギニアに送られる途中、メナド沖で輸送船（めきしこ丸）が敵潜水艦の雷撃を受けて轟沈、二日間泳いで救助され、メナドに上陸しそのまま軍務についた。その後、20年8月15日の敗戦・ビトゥン抑留、21年5月内地引揚げを体験した。当然、抑留された場所については詳しいものと思い込んで「どのへんでしたか」と尋ねたところ「よくわからない」と返答されてがっかりきた。約8カ月も生活した場所がわからなくなるほど景観が変わった、ということらしい。

昨年亡くなられた大岩トミさんにも尋ねた。大岩さんは先の戦争中日本に住んでいた。終戦後5年目にメナドに帰ってきたので、もちろん収容所生活の体験はないが、元・東インド水産の従業員などから聞いたという話を覚えていた。

いくつかの手記と二つの証言、この断片的な情報を組み合わせ、独断もまじえて「収容所」の大まかな「区域」を決めてみよう。

はじめに起点を決める。起点は（ビトゥンに向かって）ギリアンの商店街に入る手前の橋（長さ約15メートル）とする。橋の下には川が流れているが、樹木が茂って橋上の車からは見えない。橋の左手（北）が上流で右手（南）が川口にむかう。この橋を渡ってビトゥン方向（東）に5キロ進むと大通りの真ん中に鯉のモニュメントがある。ギリアンの橋からここまでの東西5キロを基準線・第1の線（または南の辺）とする。この道路は昔も今もビトゥンに出入りする幹線道路である。いわば国道1号線で、海岸沿いにある。道路と海のための狭い平地には水産加工場（缶詰、鯉節など）、ヤシ油工場、LPGステーションなどが並ぶ軽工業地帯になっているが、当時は椰子が生える砂浜であったと思う。20年ほど前まで、その面影が残っていた。第1の線の東端を鯉のモニュメントまでとしたが、実際はもっと手前（ギリアン寄り）になるかも知れない。鯉のモニュメントができて、よい目印があるからと、はなはだいい加減な理由で「モニュメントまで」とした。

次に、モニュメントのある位置から直角に折れてドウアスダラ山（北）に向かう。なだらかな上り坂である。約400メートル、山頂にむかって緩い坂を上ると、東西に通る道に突き当たる。つきあたりの道の向こう側にビトゥン市長公邸がある。この400メートルは中央分離帯もある立派な道路である。もちろん当時はせいぜい口ダが通れるくらいのただの山道であったろう。これを第2の線（東の辺）とする。

市長公邸前を左に折れて西方に進む。第1の線（海岸沿いの幹線道路）の山手側を逆方向に進むことになる。第1の線は本格的な幹線道路であるのに対して、この山手の道は曲がりくねり、上

り坂あり、下り坂あり、直線部分はほとんどない。いまだに原野も多く、ところどころに新規開発の住宅地が目立つ。視界が開ける場所では右手（北）にドゥアスダラ山、前方（西）にクラバット山が見える。7キロほど走ったところで、幅が狭く流れが急な川に突き当たる。先ほど起点とした橋の上流である。市長公邸前からここまで、車の距離メーターではほぼ7キロと表示されるが、カーブが多いので直線距離なら6キロ弱くらいか。ピトゥン市長公邸前からここまでを第3の線（北の辺）とする。左折して川沿いに南東方向へ400メートル進むと起点のギリアン橋に達する。この川筋を第4の線（西の辺）とする。

これまでに入手できた手記や証言、地形的な条件などに鑑みて、「日本人抑留地は上記東西南北の4辺に囲まれた区域」、と決めつけても大きな誤差はないように思う。しいて言えば、第3の線（東の辺）はもう少し手前にあったかも知れない。適当な目印になるということで、鯉のモニュメントのある場所で勝手に設定した（モニュメントは最近できた）。

連合軍が日本人抑留地を定めるに際して、海岸・川・山などの地形、集落、港など、現実目の前にある状況に合わせるとすれば上記の範囲を囲うのが合理的であったと思うし、抑留された側が残した手記や証言とも整合していると思える。

抑留される日本人は、所属部隊とか会社など、それぞれのグループごとに指定された民家（現地住民を追い出した住居跡）に入り、その家が手狭であれば適当に増築・新築を行って抑留生活を送った。「民家」と言っても場所が場所である。山番の小屋とか掘っ立て小屋の類でしかなかったであろう。

抑留生活の様子については小坂氏の手記も少し触れているが、手元にある南洋拓殖会社（南拓）社員・木口寅雄氏の手記から食料に関する部分だけ抜き出してみよう。（ ）内は編集者注記。

「ドゥアスダラ山麓山小屋生活の思い出」 木口寅雄

「昭和20年9月中旬より21年5月上旬まで約8カ月間の出来事」

食事当番は2名が10日間交代で従事し、当番はこの間、農耕に従事する必要がなかった。

小生が20名の栄養保全を担当しておったので、毎月1回、3キロメートル離れている海岸の海軍軍需部に行き、20名1か月の食糧の配給を受け、ロダ（牛車）に積んで運んだ。軍需部の配給は、一人一日1660キロカロリーと、連合軍の命令が守られていた。

配給食糧は、乾パン、缶詰、乾燥野菜が主で、コメは一日一人1食に足りないほどであったが、夕食の1回だけ米飯に缶詰、野菜を混入したもの（雑炊）で充分であった。保存のできるものはできるだけ長い抑留生活に耐えられるよう考慮した（保存した）

食料はほとんど農作物で賄い、20名の食生活には充分で、満腹感を味わった。毎食後にはバナナをムロ（熟成用室）から取り出して供給した。ニワトリは重要な動物蛋白源であったが、食し

たのはたまで、できるだけ増殖に努めた（南拓グループは引揚げ直前時点でニワトリ約200羽を確保していた）。魚は毎月2回、海軍病院にバナナを200～300Kg 供出して、その見返りに生の鰹や小魚の干物をもらい受け、生魚は刺身にしたり、汁の供にした。野菜は南洋ホウレンソウ（カンクン）や、室川君が作ってくれた野菜で充分であった。主食は、朝食は甘藷やトウモロコシを煮たもの、夜は前述のとおり米飯（雑炊）を食した。}

木口氏の南拓グループは、会社の性格から農業・畜産業の専門家がそろっていた。甘藷、野菜、バナナなどの栽培、ニワトリの繁殖などお手のもので、配給食が少なくても不安を全く感じていなかったようだ。抑留中の食事情はグループごとに異なっていたようだ。「親しくしていた現地住民がニワトリやバナナを差し入れてくれた」、という手記もある。

ビトゥンの日本人抑留地には南洋興発、南洋拓殖と、代表的な南進会社のグループがいたが、海軍病院を相手に、南興は砂糖、南拓はバナナを納めていたというのも面白い。小坂氏の南興グループも砂糖上納の見返りは「魚」であったと思われるが、その魚を獲っていたのは誰だろうか。現地の漁師だろうか。抑留中の日本人漁師が鰹を釣って「上納」した可能性もある。

先に名前の出た青木さんは、「海が近いので、時には漁具を仕掛けてサメを獲った」と言っていた。青木さんは陸軍の下士官であった。

外地での抑留生活は大体、悲惨な状況に陥るのが相場である。インドネシアでもジャワ島・バリ島などでは独立運動がからんで、8月15日の終戦以後も日本の軍人・一般邦人に多くの犠牲者を出した。北部セレベスに限っては、戦犯容疑で拘束される者も出たが、比較的のんびりと抑留生活を送り、昭和21年5月の内地帰還にこぎつけた。(長崎)

[illegible]

編集後記

光陰ミサイルの如し。つい先日令和二年（2020）を迎えたと思ったら、あっという間に 1 月も明日まで。来週は 2 月に入ります。

わが日本に中国発の弾道ミサイルならぬ新型コロナウイルスが飛びこんできました。水際での上陸阻止に失敗して、日本国内でもジワリジワリ浸透しているようです。かなりヤバイ事態となっていて心配です。

今号は中村さんにインドネシアの医療保険制度についてレポートしていただきました。インドネシアの医療保険制度もかなり進んできたものだと思います。数年前までインドネシアで医療保険といえば民間の保険会社のものだけで、一般庶民に医療保険というのはほとんど無縁のものでした。病気になれば身分相応の治療を受けるしかない。たとえ、あの病院で適切な治療を受けることができれば治るだろうとわかっていても、医療費が支払えないということになれば仕方なくあきらめて、そこらへんの“伝統的な”治療法にでもたよるしかない。

私自身の話になりますが、10 年ほど前に大病を患いました。私は日本国民ですから国民健康保険に支えられて、貧乏人ながら金銭的な心配をすることなく無事に回復しました。

金銭的な問題だけでなく、インドネシアでは医療設備・技術的にもまだ安心して任せられるような状態ではありません（金持ち用の設備の整った私立病院はあるようですが）。私を診察したメナドの医者最初の言葉は、「すぐに日本に帰って手術してもらいなさい」でした。ここでモタモタしていたら助かる命も助からないと言います。実に簡潔、的確なアドバイスであったと思います。ビトゥンに戻ってすぐに沖縄の親戚・家族に連絡、病院の段取りをしてもらってから帰国。一週間後には沖縄の県立病院の手術室で麻酔をかけられていました。目が覚めたら病室で、体のあちこちからビニールのチューブが出ていて、もちろん身動きできません。二日目、三日目と回復するにつれて周りの様子を観察する余裕もでき、看護師さんたちとも冗談を言い合えるようになって、「思ったより居心地がいいな」と満足しました。若い看護師さんたちが入れ替わり立ちかわり現れて話し相手になってくれます。生まれてこのかた、これほどモテたことはありません。

居心地の良さを感じながら、数年前に入院中の友人（日本人）を見舞いに行ったマラヤンの総合病院を思い出して比較したりしていました。「やっぱり日本だな」。

それ以後、この入院事例をネタにして日本人であることのありがたさをまわりの人々にも機会あるごとに話しているところです。

さてインドネシアの健康保険制度ですが、最近は自分の周りでもときどきこの保険の話を聞くことがあります。現地の皆さんの話だけでは分かりにくいことでしたが、中村さんにやや詳しく説明していただきました。まだ不完全な制度だと思いますが、ここは発展途上国です。今後、制度がよりよく整備されていくことを期待して、編集後記とします。（長崎）

会員名簿

会報「タルシウス」電子版では不特定多数の方が閲覧するため、セキュリティ上の観点より会員名簿は非公開とすることとしました。

(2014 年 04 月 20 日)

上記理由により会員名簿が非公開になりましたことをご了承ください。

- 会報タルシウス（製本版）には従来通り名簿は掲載されます。
- 各会員に対しましての個別の、または、尋ね人などのお問い合わせは、

直接日本人会へお問い合わせください。

該当会員に連絡後、会員より直接連絡するか該当会員の同意のもとで、

連絡先をお知らせすることといたします。